

序
章

雪^{ゆき}

夕^{ぐれ}



田舎町に粉雪ちらちら舞う、二月十四日の夕方。

「はい！ これ、バレンタインチョコ！」

「う、うん。はい」

ラッピングされた包みを突きつけられてへどもどとうなずきながら、僕は通りに面した古びた文房具屋を見やる。

対峙する少女が店のガラス戸に映っていた。どちらも中学生、学生服姿。少年の方は、「吸血鬼顔」などと失礼な評をされたこともある青白い細面に、冷や汗を浮かべている。

無論、その少年が僕だ。

ところで、僕が横に視線を向けているのはふたつばかり理由がある。自分の鏡像をわざわざ見るためじゃない、そこまでナルシストではない。

ひとつめの理由。

……現在真正面からは、すさまじいとしか形容できない気迫が叩きつけられてきている。気圧されてついつい目が泳いでいるという次第で……

「念押しとくけど義理じゃないからね！」

目をぎらぎら光らせた同級生の少女が、足をふんばって両手で包みを差しだしてきているのだ。

この同級生の髪型はごくふつうのミディアムボブなのだが、いまは毛先が浮いて、猛るライオンのたてがみのように見える。いや、風でときどきなびいてるだけなのだが、そう錯覚するくらいはりつめた雰囲気なのだ。あまつさえ限界近くまでくわっと両眼を見開いているせいで、ぶっちゃけ怖い。目も泳ごうというものだ。

それから、ふたつめの理由。

（ほか、見るな。こういうときは空気読んであっち向いててよ）

僕は横にいるやつに、威嚇と懇願の混ざった視線を送っているのだ。

……そして絶望させられた。にらみつけの意味がまるきり伝わっちゃいないことに。

「うわー。うわー」

僕らの横にたたずむ「そいつ」は、目を丸くしておもいきりガン見だ。

緋色の小紋。蛇の目の和傘。

艶っぽい外見の和服女性。

興味津々なことを隠そうとせず、泣きぼくろを目尻に添えた瞳を輝かせている。開いた傘をくるくる回すその興奮っぷりが心底うっとうしい。……黙って静かにしてさえばモデル顔負けの美女だと思うんだけど、中身がこれなものでふだん色気のかけらもない。

「うわー、知識はあったけど初めて見た！ これが人間の求愛行動なんだね、少年！ 君たちはつ

がいになるの？」

うるせえあつち行きやがれください。和服女を追い払おうと必死に目でシッシツしていたら、
「さつきからなによそ見してんの？」どすのきいた声が正面から来た。

「あつ、いえ、なんでも」

「誰もいないほう見てないで、はやく手を出しなさい！」

「そうだよ、早く受け取ってあげなよ、少年」

和服の女まで口を出してくる。

やむなく僕は手を出し、お礼を言いながら同級生からチョコを受け取る。

すると同級生はいよいよまなざしを鋭くして、早口でうながしてきた。

「それで!? 返事はどうなの!」

僕の正面に仁王立ちするその少女とは、子供のころから友達だ。でもこんな決死の表情は初めて見る。

世間一般ではバレンタインデーと呼ばれる今日この日、僕の放課後の行動はふだんと変わりなかった。文房具屋前へいつものように寄り、この和服の女とだたら話しながら時間をつぶしていた。それがまずかった。

まさか僕を捜して帰路まで追いかけてくる子がいるとは思わなかったんだ。

「う、嬉しいんだけど、ほら、僕らはまだ中学生で」

「なにかマトットてんの? 付き合ってる子たちなんて学級内に何人もいたじゃない!」

「ほ……ホワイトデーまでに返事するってことでいい?」

和服の女に聞かれて以上、切実にこれ以上この場でこの話をしたくなかったので、とりあえず僕はそういう。

が、

「あんた遠い高校の入試に合格したんでしょ。月末にはこの町出てくって話のくせになにいつてんの?」

冷やかな指摘に、ぐっと詰まらざるをえない。

「も、もちろんそれまでには返事するよ」

「男らしくないよ。この場で聞きたいの!」

即座に却下される。おかしい。愛の告白というより決闘を申し込まれているような気分になってきた。

ちよつとグチを垂れ流すけど許してほしい。

ドラマや漫画なんかでは情熱あふれる少年少女が人目をいとわず好きな人に劇的に告白、なんてシーンがあるだろ。あのシチュって、「それだけこのキャラは相手が好きなんだ」もしくは「こい

つはそれだけ思い切った行動をするキャラなんだ」って印象づけたい作者の思惑なんだろうけど……実際には僕らみたいな思春期はじめごろの子供の大半は、大人よりよっぽど羞恥心しゅうちしんが強い。そうそうあんな派手なことやれたりしないんだ、仲間内でのノリっていう魔法の空気でもないかぎり。何がいたいかというとつまり、告白する場面を人に見られるなんて僕ならまっぴらごめんだ。だって、告白される場面を見られてるだけでこんなにも恥ずかしいんだから。

「あ、あのさ……町中だし」

ちよつと移動しようよ、と続けて申し出るつもりだったけれど、同級生には首を振られた。

「いまは誰も見てない。だからいまのうちにすっぱり決めて！」

見てるんだよ。きみには姿が見えてないだけで。

「そうだよ少年、ここは決めないと！ がんばれ、見届けてあげる！」

和服の女が好奇心まるだしで食いついてくる。うちの神社にこの騒がしいモノノケをおとなしくさせられる御札とかないかな、と考える僕。

……無理かな、こいつも一応は神らしいから……

こいつは自動販売機の精。

付喪神つくもがみだ。

同級生がいなくなつてから、僕はいつもどおり自販機の精にコインを渡した。

彼女は鼻歌を唄うたいながらそれを硬貨投入口に入れる。上品にいつレトロ、率直にいつオンボロな筐体きやうたいからがしゃこんと音がした。

へ今日もあなたはペーpsiコーラー♪

でたらめな歌を口ずさみ、自販機の精は取り出し口にかがみこんだ。彼女は長い髪が落ちかかるのを片手で押さえながらコーラの缶を取りだす。いつものように。

「なんで僕のときだけ変な歌なんだよ……どの商品買つてるとか歌うなよ、顧客情報の漏えいだぞそれ」

僕は彼女に憎まれ口を叩く。いつものように。

ただしこの日は、そのあとがいつもとは違った。彼女は取りだしたコーラ缶をこちらに渡さないまま、不可解だとばかりの口調で問い詰めてくる。

「ところで、なんでさっきの子をふっちゃったんだい」

「……はやくよこせよ、コーラを」

「いい子だったじゃないか。ちょっと肩に力入ってたみたいだけど、それだっしょうがないと思う。だって人って恋をするといういろいろおかしくなるそうじゃないか、同じ人間なんだから君はわかってあげないと」

「ちっ、マジうつせーな！この妖怪のぞき見ババア……」

「シェイクいくよ、少年」

「やめろ！炭酸飲料でそれだけはやめてください！」

しゃしゃこ本当に缶をふりはじめた自販機の精を必死で制止にかかる。揉みあつてなんとか缶を奪った。

乱れた長い髪を手で押さえつつ、自販機の精がぶんむくれる。

「ババアとはなんだい、私はまだ二十歳ちよつとだ！外見年齢が実年齢とちよつと釣り合ったところだよ！」

「自販機の耐用年数は調べたら五年だったぞ、すでに他人様の四倍生きてるじゃねーかおまえ！」

あと、精神年齢は確実に伴ってない。

ぶんすかしながら赤い小布で髪をたばねなおしていた彼女は、ぽつりといった。

「あれかな。遠恋つてやつになるから断ったのかい」

「まだ首突っこんでくるのか……別にそれが理由じゃないよ」

「あの子を嫌っていたようにも見えなかったけど。君たちは子供のころから仲良くしていたじゃない。ときどき私のところにも一緒に来てジュース買っていたでしょう」

こいつ同情してるのかな、と僕は気づいた。あの同級生はこいつにとっても昔からたびたび見かけた町の仲間だったはずだ。

ふられた女の子を思いやる、おせっかいな街角の自動販売機。

「そりゃ幼稚園からの友達のひとりだったんだから嫌いなわけないだろ。どっちかといったら好きだし、いい友人だったけど、だからって付き合うのは別の話だ」

答えながらも、僕は思い出していた。最前の同級生の告白を。

『断られるのはわかってた。ケリつけときたかったんだ、返事ありがと』

つくづく女だけど男らしいやつだった。ちよつと感傷を覚えながら僕は缶を開ける。

プルトップを起こしたとたん、汚らしくごぼごぼとあふれだすコーラの泡。

……中身を落ち着かせるのを忘れてた……

もったいねーと毒づきながら僕は缶をかたむける。むせないよう注意しながらさっさと泡を処理している僕の横で、「別の理由……」首をかしげて考えこんでいる自販機の精がぽんと手を叩いた。

「あ、わかった。ほかに好きな子がいるんだ。だから断ったんだね」

【たんさん が 気管 に INしました】

僕はカニよろしく泡をのどから逆流させた。

「うぐフ、ゴブッ」

うつむいてせきこむたびにコーラの気泡が口を押さえた手指の間からあふれる——こらえようと唇を閉じると鼻から噴出。

【たんさん が 鼻孔 から OUTしました】

「し、染みつ、炭酸がっ！ 鼻の粘膜に！」

「何やってるんだい、カタナイなあ。君はほんとうに子供だね」

悶絶する僕を前に呆れた声を出す自販機の精。この女……！

が、殺意が高じる前に自販機の精は僕に歩みよってきた。彼女のとりだした手巾しゆきんが僕の鼻に当てられて、橘たちばなの花に似た良い香りが鼻奥にとどいた。

「はい少年。ちーんしなさい、ちーん」

「う、うるせえ！」

顔が真っ赤になっている自信がある。僕は自販機の精からあわてて身を離し、学生服の袖そでで鼻をぐしぐしとこすった。

彼女は気にしたふうもなく手巾をしまう。

「あーあ、コーラいっぱいこぼしちゃったね。なんなら前みたいに私のぶん分けてあげようか。どうせ私は一口で足りるし」

こいつはなにも食べないが、ただ一日一回、自分の本体から缶を買って飲まねば元気が出ないのだという。

僕は手をふってその申し出を断る。

「そう？」

自販機の精は自分のぶんの缶を買ってきた。柔らかな朱唇が、缶の飲みくちに触れる。もつと子供だったころ、僕は彼女が一口だけ飲んだ缶の余りを毎日もらって飲んでいた。そのことを思い出して今ごろどぎまぎしはじめ、僕は彼女の唇から視線をそらした。

……どこで道を踏み外したんだ、僕は……

動揺を心底情けなく感じつつ、ちょっと来し方を思い返してみる。

第
一
章

精^{しやう}

霊^{りやう}

歌^か



一、

へわが故郷は、楠樹の若葉灰かに香にほひ、
葉びろ柏は手だゆげに、風に揺ゆる初夏を

最初は、母さんに連れられて幼稚園にいく途中だった。

甘く澄んだ歌声が耳にとどいて、黄色い園児帽をかぶった幼児の僕はふりかえった。

葉洩りの日かげ散斑なる、糺の森の下路に、
葵葛の冠して、近衛使の神まつり

文房具の店にくっついた自動販売機の前。そこに彼女は立っていた。

二十歳ごろの女の外見。緋色の小紋を細身にまとい、帯は綸子の灰白色。

ふつくらはとりつめた胸に両手をかさねて置き、晴れやかな歌声をつむいでいる。

塗の轅の牛車、ゆるあかにすべる御生の日、
また水無月の祇園会や、日ぞ照り白む山鉦の、
車きしめく廣小路、祭物見の人ごみに、
比枝の法師も、花賣も、打ち交りつつ頽れゆく……

冴え冴えととのつた面立ち。切れ長の目端に添った泣きぼくろが艶めかしさを増している。長い黒髪は半ばで赤い小布によってくくられ、肩ごしに胸前にまわされていた。彼女の背後では、閉じた和傘が自販機の横にたてかけられてあった。

(テレビにでてるひとみたい)

それが当時の、語彙のとぼしい僕が抱いた第一印象。

母に手を引かれてうながされてもぼかんとして見続けていた。

……かなたへ、君といざ帰らまし。

じっと見つめていると、歌い終わった向こうも僕に気づいたようだった。

すこし驚いた顔をしている。ややあって彼女は、にこにこしてこちらに手をふってきた。

びっくりとして、僕はその人を指さしながら母さんを見上げた。しかし母さんは「なあに。なんなの、ジュース飲みたいの？ 幼稚園に行くからいまはだめよ」と困った笑顔になっただけである。

そのとき幼児の僕は気づいた。
（おかあさんには、あのおねえさんがみえていないんだ）
ということ。

（あれはちがう。にんげんじゃない）
直感で断定し、僕は女の存在をそれ以上訴えようとはしなかった。

（おかあさんはからだがよわいんだからおどろかせてはいけない）
以来、文房具屋の前にさしかかると、僕はぐいぐいと母さんをひっぱって早く離れるようにしていた。

人間ではないその女は、ちょっと傷ついたような寂しそうな顔で見てくる。

二、

小学校に上がってすこしたころ。

登下校に母さんの付き添いもなくなり、下校路の大部分を一人で帰るようになって、当時の僕は

大変困っていた。

一人だと、あの僕以外には見えない女が怖い。

（あれはぜつたいにんげんじゃない）

その確信のもと、遠回りしてでもけっして文房屋の前は通らないようにしていた、のだが……あるとき、女が傘を広げて鼻歌交じりに町のなかを歩いているのを見てしまった。

僕は恐慌状態に陥った。

ジバクレイとかなんとかいうあれで、あの自動販売機の前から離れられない存在なのだろうと思っていたのに、相手は予想外にフリーダムな行動を取っている。いくら出没場所を避けようとしても、町中でかち合う可能性が出てきたのだ。
じょうだんじゃない。どうすればいい。

いろいろ考えた末、ある昼下がりに当時の僕は勇気をふりしぼった。ひとりで文房具屋の前に行ったのだ。

そこで、変わったものを見た。

へなにをか贈ろ、花贈ろ

憂い顔なる此方様に

楽しげに歌う彼女は、自動販売機の前に屈みこんで缶を取り出そうとしていた。片手に下げた花のかごからは、嗅いでいると疲れが消えていくような芳香が立ち上っている。

華籠に摘みきた白薔薇

君ます方に参りたやと

彼女の後ろにはヘルメットをかぶった中年の土木作業員が立っている——その作業員のおじさんは、女が見えているわけではないようだが、飲み物を選ぶボタンを押したまま、放心したように動かなくなっていた。

震え上がる僕。

現在では見慣れた光景だが、当時の僕にとってはそれは魔女が妖しげな術を使っているとした見えなかった。いくらいい歌声にいい匂いだからといっても、初見では怯えてもしかたがないはずである。

作業員のおじさんは最初、機嫌悪そうに眉をしかめていた。だがそのしかめっ面は、歌にあわせてちよつとずつ柔らかくなっていった。着物姿の女がコーヒーの缶を取り出してふりむき、魂を抜

かれたみたいにはんやりしているおじさんに渡す。

「はい、『当たり』を出したあなたにサービス。こんなものしかないけど」

かれの肩のところに、かごから白い花びらをつまみ出してふりかけながら。

「じゃあね。またここで買ってね」

缶を受け取って、おじさんは夢から醒めたように目をぱちくりさせる。首をかしげながら、僕とすれちがって立ち去っていく。——疲れを癒やすすい匂いが、花びらとともにおじさんの服に移っていた。

女は見あげている僕に気づいて、にっこりした。

「あ……君、やっぱり私が見えるんだ。上の神社の子だね。だからかな？」

「きえろ、おばけ！」

かがみこんで目を合わせてきた彼女の笑顔に、持ちだしてきた浄めの塩を思いきり投げつけた。顔面に塩をぶつけられた彼女は目が痛いと泣きだした。

泣きながら持っていた和傘をふりかぶって、剣道の面撃よろしく僕の脳天にふりおろした。こぶができて、僕も泣いた。

退治することに失敗して泣きながら逃げ帰ったのち、僕は前にもましてびくびく日々を過ごしていた。呪われやまいかと、極度の不安にさいなまれていたのである。そういう凶事はいつまでたっても訪れなかったが、それでもあのおばけの報復を僕は恐れつづけた。

……そのまま交流もなく大きくなれば、いまでも僕は彼女を忌み嫌っていたかもしれない。事情が変わったのは、小学二年生の春の出来事だった。

それはよく友達と集まって遊ぶようになったころの話だ。その日はつつい夢中で遊んでしまい、気がつけばあたりが暗くなりかけていたのである。

友達に手をふり、田園のなかの細道をたどって家路につく。歩きながら幼い僕は不安が高まるのを覚えていた。

(はやくかえればよかった……)

夜に出歩いたことがあまりない幼子のことである。故郷の田舎町であっても、黒々としているだけでまるで別世界に見えた。しかも悪いことに僕の家は山ぎわ。あまり人家や街灯が多くない、夕闇ひときわ濃い場所にあるのだ。

逢魔が時^{おうまとき}という呼び方を知ったのはもつとあとのことだが、そのときの僕はまさに魔物にでくわす可能性におびえきっていた。

(あのおばけに出あったらどうしよう)

びくびくしながら、崩れかけの土塀をもった古家のある辻^{つじ}にさしかかる。

肝がつぶれかけた。

「あ、神社の少年」

和服のあの女が辻を曲がったところにいて、僕を見るなり呼びかけてきたのだ。川に面した路上で、なぜか手製の看板のようなものを抱えている。墨をふくませた筆で、看板になにやら書こうとしているところのようだった。

「ちようどよかった。君が私に対してやった狼藉^{ろうぜき}は許しがたいけど、それどころじゃないから忘れてあげる。あのね、私の言葉を聞ける君に、みんなに伝えてほしいことが……」

「ひいっ」

伸ばされた手をとつきにかいくぐり、猛烈な勢いでダッシュをかける。

「あっ、ま、待って！」

背後から追いつがってくる気配に、僕は真っ青になって逃げ足を速めた。

「逃げないで！ 待ちなさいっ」

「くるなあ！ まつけないだらっ」

女のおばけの声にいつそう恐怖がこみあげる。一刻も早く家に逃げこみたかった。さいわいにして家は遠くなかった、川を渡って坂を駆け上があればもうすぐそこなのである。

そして、近道を僕は知っていた。

もう目前にある、小川にかけられた古い木の橋。

その朽ちた橋には手すりすらない。腕ほどの太さの丸太三本を兩岸に渡し、上に板をかけて釘で打っただけの、あまりにも簡素で粗末な橋だ。幅が狭いため自動車は通れない——『畑をたがやすのに牛を使っていたところからある橋だなあ。危ないからこの上を通っちゃならんぞ』と、近所のおじいさんに聞かされたことがある。しかし、僕を含む子供たちは大人の見ていないときはよくこの小橋を使っていた。

なにしろ毎日のように、遅刻しそうな中学生が小橋の上を駆け、自転車が走る。農作業をしている老人たち自身がひんばんに渡っている。小さい僕らが渡っても壊れるはずがないと思いこむのは無理もなかったし、現にずっとそうだった。

だから僕は、なんのためらいもなく、

逃げるために、勢いよく木の橋に駆けこみ——

「だめえっ！」

背後で、おばけが焦りの叫びをあげた。

「その橋はもう駄目なのっ！」

みしっと足の下で、腐った板が軋んだ。続いてばきりと板の下でなにか（おそらく丸太だったろう）が折れる音……あんないやな音を聞いたことはそれまでなかった。

次の刹那、僕は板を踏みぬいて落ちていた。

その小川の水深は三十センチほどだが、橋と川面の高低差は二メートルあった。

着水したのは足からだったが、川床の苔むした岩は一瞬で僕の靴底をすべらせた。僕は落下した勢いのままあおむけに転倒して盛大な水しぶきをはねあげる。口から気管へと一気に水が流れこみ、同時に衝撃がぐわんと後頭部で炸裂し……

ぼんやり目を覚ますと、涙声が間近で謝っていた。

「ごめんね、ごめんね」

ぐったりした僕は女のおばけの背におぶわれ、家へと運ばれているところだった。頭はずきずきして、髪から靴下までぐしょぐしょに濡れていた。

「橋のテンメイがもう尽きて壊れそうだから、だれかが大怪我しないよう人間に伝えなきゃって思ったのに。君を怪我させることになっちゃった」

(……よくわからないこといってる……)

あれほど避けてきた彼女に捕まっているのに、僕は恐怖をまったく感じなかった。その理由の一端はおそらく、警戒する気力もないほど消耗しきっていたからだろう。

だがそれだけではなかった。うちしおれた様子の彼女のしゃくりあげを聞いているうち、理屈ではなく心に染み透ってきたのだ。彼女にはなんの悪意もないのだということが、
なによりも、

(このおぼけ、あつたかくて、やっぱりみかんの花みたくない匂いする……)

川水で濡れそぼって僕の体は夜気に冷えていたが、彼女の背と密着した部分だけはぬくもりを感じていた。

「すぐ君の家に連れてくからね、少年。もうすぐだから」

彼女の涙まじりの声を聞き、その服や髪からたちのほる橋たちばなの香気に包まれて、安心感がひたひた満ちていく。

白く優艶ゆうえんなうなじに頬を押しあてながら、僕は彼女への認識をあらためた。

考えてみれば、最初に喧嘩けんかしたとき相手の攻撃は普通の打撃だった。特に呪われたおぼえもない。いまはこうして運んでもらっている。

(こいつ、こわがらなくてもだいじょうぶかも……)

神社の鳥居と、道をはさんでその向かい側にある我が家の明かりが見えてきていた。

ひどいこぶが頭の後ろにできていたし、意識を失ったときに川の水をだいぶ飲んでいたようだが、おおむね大したことはなかった。

二日後、僕は自分からおばけに会いに行った。頭に包帯を巻いた僕がこわごわ歩み寄っていくのを見て、彼女は目を丸くした。

四、

しばらくはまだごちなかったが、すこしずつ警戒は薄れ、やがて僕は彼女と普通に話すようになった。

「私はこの自動販売機に宿った意識が形をとったものだよ、少年」

胸をえへんとそらして、彼女は主張する。

「付喪神つくもがみともいうね。つまりこう見えて神々の端くれであり、君は私にそれ相応の敬意を払わなければならいんだよ？」

「あ、ツクモガミ知ってる！ ヨーカイの一種だってアニメで見た！ ……やっぱりおばけじゃな

いか！」

僕が食塩の袋（五百グラム入り）をランドセルからとりだすと、彼女は泣きそうな顔になって開いた傘をバリアみたいにかまえる。

「お、お化けじゃない！……とはいいい切れないかもしれないけど、私はなにも悪いことをしていないし塩で祓^{はら}われるようなケガレた存在でもない！塩なんかぶつけられたって痛いだけだよ！」

自動販売機の精。

名無しの彼女を、僕はそう呼ぶことにした。

最初は自販機の妖怪^{ようかい}と呼んでいたのだが「妖怪なんて可愛くない呼び方はいやだ妖精^{ようせい}にして」と彼女は猛抗議してきた。

「僕の倍以上はあるいいトシした見た目のくせになにが妖精だよイタイタしい。痛ビクシーとなら呼んでもいいけど」と答えたところ、つかみ合いの喧嘩になった。

こいつオトナのおねーさんなのは外見だけだ、と完全に悟ったのはその時である。最初の喧嘩のときから薄々わかっていたが。

とにかく、すったもんだの末に精とだけ呼ぶことで決着を見た。

その自販機の精だが、見た目は人間でも、話を聞いたらやっぱりありえない存在だった。

まず睡眠を必要としない。

「眠いという感覚がよくわからないよ。しんどくならないのかつて？動けば疲れるけれど、しばらく立っていたら治るしね」と彼女はいう。

寒暖を感じることもないらしい。

「寒い暑いも知識としてしか知らないなあ。少なくとも、人間のように季節に合わせて着込んだり脱いだりはしなくても大丈夫だよ」

着替えの必要がない。

「服はこれしか持っていないの。……汚くないよ、泥ついたってコーヒーこぼしたって時間たてば元通りになってるんだから！」

年をとらない。

「私が出てきたのは十六年くらい前かな。最初からこの姿だったよ」

これだけならちょっと羨^{うらや}ましいくらいである。だがひとつだけ当時の僕が同情したことがある

彼女は物を食べない。

お腹が空かないだけでなく、料理の本に載った写真を見せても、おいしそうとは思えないらしい。ために彼女を夕方の商店街にひっぱりだし、お惣菜^{そうざい}が売られている店先を見せてみたりもしたが、

やはり無理だそうだ。

「人間って本当にああいうものを口に入れたいって思うのかな。うーん、どう例えればいいのかな。食べられそうだけど食べたくもならない、そういうものが少年にはないかい？」

「消しゴム」

となりの席の田中くんが『カマボコと思えばいける』といって消しゴムを食べてみせたけど僕はそれを見ててもぜんぜん食べたくなかったよ——細部はうろおぼえだが、そのようなことを彼女に話したと思う。

自販機の精は「この文房具屋でも消しゴムを並べているけれど、あれを食べる人間もいるんだね」と感心したあと、

「そうだね。たぶん私にとっての『人間の食べ物』は、君にとっての消しゴムと同じだと思う。それ自体は見ていても嫌悪感が湧くわけじゃないし、やろうとすれば食べられるはずだけど、試したくもならない」

ではなにも口にしないのかというところでもなくて、缶ジュースや缶コーヒーを一日一回飲んでいる。つまり自動販売機で売っているものなら口をつけるのだという。

「これだけは体が欲するというのかな？ 飲まないとなんだか落ち着かないんだ」

後から知ったが、神へ供えられた飲食物を神饌しんけんというんだそうだ。

正確には、彼女は賽銭さいせん（後述する）を使って自分で飲み物を買っているので、供えられた食物とはいいいにくいけれども。

なお、缶の中身すべてを飲む必要はなく、「神饌を口にする」という行為そのものが重要とかなんとかで、すこし口をつけるだけでじゅうぶんだった。一方、困ったことに神饌は新しいものでなければならず、飲み残しを次の日に飲んでも効果はないのだそうだ。だから彼女は毎日、自分の本体である筐体かうたいから缶を一本買っている。

で、それが僕がこいつと仲良くしはじめた理由でもある。

「はいどうぞ、少年」

彼女は僕がその場にいと、缶の中身の大部分をくれるのである。お手軽に懐柔された僕。中学生の今ではそうでもないが、小学校のころの僕にとって毎日コーラが飲めるのは魅力的だった。

当時、僕は自分から父さんに申し出て一切のおやつを辞退していた。……事情があつて、家の金を使うのが心苦しかったのだ。その代わり、こうして外でジュースを飲める機会を確保したという次第である。

そんなわけで下校途中に文房具屋前に立ちよって、変なお化けにおごってもらう日々が続く。

……通って数年もするとその自動販売機が意外に、というか異様に繁盛していることに気がつく。その夏の日も、自販機の精が一口だけ飲んだコーラを僕がかたづけている前で、三人もの客が順番待ちの列をつくっていた。上機嫌となった自販機の精は雨でもないのに傘を差してくるくる回し、列の横で野ヒバリのように歌っている。

へ夏の日ざかり旅ゆけば、

泉のほとり野の木かげ、

憩^いへる人の多かるに、

人もとめよる便りあり。

さらに二人の通行人が「なんだかのど渴いたな」という顔つきで集まってくる。そして列に並ぶや夢遊病患者みたいなぼんやりした表情に変わる。ぼーっと瞳^{ひとみ}の焦点をさまよわせながら無言で金をのろのろ取り出す人々。

セイレーンかよ……と僕は、友達の家でやったゲームに出てきた怪物のことを連想する。歌で人をひきよせて餌食にするという、ヨーロッパのほうの女お化けだ。

さすがにもう自販機の精を怖がりはいしないが、この光景を見ていると若干引くなあ……こういう売り方ってアリなんだろうか。

「あのさ、おまえの歌なんだけど……」

缶を手にした人々が解せぬと首をひねりつつ去っていったあとで、僕はためらいがちに話を切り出した。彼女の歌のアブない効果について聞きだし、場合によってはそれをやめるようにいうつもりだったのだが、

「もう、またおまえなんて生意気な言葉づかいする。

あ、歌のこと？　なんで歌ってるかというと、私の本体はもともと缶が買われたときに音楽が流れる仕様だったんだよ。十何種類もパターンがあって、設置された当時は最先端だったんだから」
本体をふりむいてちよつと誇らしげにそっくりかえる自販機の精。

「いや、そこ聞きたいんじゃないさ……」

「でも、設置されて四年もしたある日、とつぜんその機能が壊れちゃったんだよね。気がついたら私は傘をさしてここに立ってたんだ。それからずうっと本体の代わりに歌わせてもらっているよ」
目を細めて懐かしげに来歴を語る彼女。こっちの話を聞けよ。

どうにか話を戻させて聞き出したところでは、
「え、人をおびきよせる効果なんて私の歌にないけれど？ 列ができてたからみんななんとなく寄つてきたんじゃない」

とのことだった。信用ならない。

「失敬だね。そんな催眠音波商法してないよ。歌に多少のリラックス効果はあるけど」

「あの効きっぷりはリラックスってレベルじゃないだろ!? 客が目エ虚ろにして、飼いなされたゾンビみたいになつてるじゃん！」

歌だけではない。

彼女の本体の繁盛には、ほかにもいくらかのからくりがあるようだった。

自販機の精は割と町中を出歩いているようで、僕が十歳になったある日うちの神社に来た。

学校から帰ってみたら境内に剪定バサミを持った彼女がいたのである。

へ庭にかくるる小狐の!?

人なきときに夜いでて

秋のぶどうの樹の陰に

しのびてぬすむつゆのふさ

鎮守の杜で木の花を剪り、歌いながらかごにせっせと摘んでいる。歌と違って隠れも忍びもしない泥棒。

「何やってんのさ」

「あ、少年。花いただいてるよ」

「せめてうちにキョカを求めなよ」

植えた花ってわけじゃないし、ジュースの恩もあるからいいけどさ。

しかし彼女は「許可もらったよ？」と神社の本殿のほうを指さした。……深く追及してはいけない気がひしひしとしたのでそこは無視し、花を採るわけを訊く。

「当たり景品として使うんだよ、これ」

そういわれて、彼女の本体が当たり機能付きであることを思い出す。

……そういうのって普通は缶をもう一本もらえるところかだと思っただけ……

「もしかして音楽機能とおなじ事情？ 景品が当たる機能ももとは本体について、それが壊れたから代わりにおまえがやってるの？」

たずねたら自販機の精が返事に詰まった。凶星か。

何度か当たりが出るのを間近で見たが、彼女が「おめでとう！ おめでとう！」といいながら花びらや木の実を相手にふりかけるのである。

ちよいどいいから前からの疑問をぶつける。

「あの花まき儀式、客の得になるの？ 花なんて食べらんないし、いい匂いの生ゴミばらまいてるだけじゃない？」

「生ゴっ……こ、これはただの花じゃないもの！ 歌より強力な癒やし効果をこめてるんだから。言祝ぎと手摘みの花の媒なかたちにより、神力があなたの心と体に活力を与えます。ふふん」

「えっと、よくわかんないけど『神の祝福で回☆復』ってこと？ ゲームじゃあるまいしー。うさぐさ極まわりって感じ。僕なら缶もう一本のほうがいいな」

「君みたいな寝で遊んでを満喫するお子様にはこのサービスのありがたさが実感できないんだよ！ 癒やしの力は疲れのたまった大人には評価されるの！」

半泣きで罵ののってくる自販機の精。

じゃあその癒やし効果ここで試させてよと要求したが、

「あ、それは駄目。買って当たりを引いたらやってあげる」

とたんに冷静に戻った彼女に拒否された。

お客じゃない人に景品をあげるのは自販機のモラルに反するとかなんとかいわれて、断固として

つっぱねられる。日頃はわりと甘っちょろい自販機の精だが、この件では頑固だ。やむなく僕は引き下がりが、ふと訊いてみた。

「……その力って病気とかも治せる？」

「ううん、病気は難しいなあ。疲れがたまったのが理由の風邪くらいには効くけど」

「そうなんだ」

世の中そんなにうまい話なんてないな、と残念に思う。

六、

いかに歌や花のおまけがついてこようと、自販機の精そのものと同じく、それらの存在は僕以外に認識されていない。だから「なぜか心身が楽になった」ことと「その前に自販機で缶を買った」ことに因果関係があると知る客なんかいないはずだ。

なんだけど、リピーターの多さをそばで見ていると、人間って無意識でもこころよさには反応して体で覚えるんだなあとな得する。

……しかし自販機の精は、たまに本体を残して散歩や花摘み（トイレに行くことの隠語じゃないよ）に出かける。その間に買った客には当然おまけがついてこないわけで、そうなる彼女の本体

はただのボロい自販機である。自動販売機としてのモラルとやらはどうした。

「だって一日中ずっとおなじことやってたら飽きるよ」ユルい付喪神つくもがみの弁。

とはいっても、人間基準でいうと自販機の精は勤勉に働いているほうだ。休日なんてないし。

あまり客が来ない時間帯になると、竹ぼうきで文房具店の前を掃いていたり、火箸ひばしにゴミ袋をたずさえて路上のごみを拾ってまわったり、美化活動にいそしんでいる。おかげでこのあたりの道路や公園はやたらクリーンだ。清掃道具は文房具屋のものを使っているという。彼女が道具を手にしても通行人は目さえ向けないので、どうやら道具もいっしょに見えなくなっているようだ。

なお公園のベンチに新聞や小説などが放置されることがある。自販機の精はそれを拾ってきて、処分する前に目を通していろいろだ。

「ううう、この読み物は初めて読む種類だけどわけがわからない」

目をぐるぐる回してオーバーヒート気味の彼女の手元を横からのぞきこみ、僕は彼女と同じくらい真っ赤になった。

「それはボルノ小説、俗にエロ本というんだよ自称神の端くれがんなもん読むなよ！」

なぜ僕が単語を追っただけでそれがボルノだとわかったかというところ、クラスメートが教室に持ってきたブツを男子全員興味しんしんで読み回したからだ。しかし神職にたずさわる家の子としては、付喪神だろうとなんだろうと神と付いたものがヨゴレイアイテムに触れているのを放置するわけにも

いかない。

だからお願いだ。だれのしわざか知らないが、フ○ンス書院は処分するなら指定された青少年有害図書回収ポストに捨ててほしい。でないとアホな付喪神が拾い読みする。

次の日の放課後に行くと、彼女はまだエロ本を持っていた。

「手放せバカ」

即投棄すべく取り上げようとしたが、意外なことに、自販機の精はかたくなに抵抗した。奪われまいと涙を浮かべて胸に抱きしめまでしている。

「なにしてんだよ。よくわからないもの読む必要ないだろ」

「だって、見てごらんこの本、こんな新品だよ。私くらい最後まで読んであげなきゃかわいそうじゃないか」

「……よくわからないこといい出した」

「これまで拾ったもののなかでもいちばん真新しい状態……買われてすぐ捨てられたんだよ、きつと」

「そりゃ……しょせんエロ本だし。そういう雑な扱い受けることもあるんじゃないかな」

どこかのおじさんが買ってみたはいいけれど、読んでみたらぜんぜん趣味に合わなかったので適

当に放り出した。事情はそんなところじゃないだろうか。

いずれにしても僕にはさほど深刻なこととは思えなかった。だが自販機の精の声はしんみりして辛そうである。

「だれかに読まれるために生まれてきたんだよ、書物というものは。たくさん読まれた末に捨てられたのならまだしも……これじゃ生まれてきた『意味』がほとんどないじゃない」

「……もったいない、ってこと？」

「違うよ……ううん、本質では違わないのかな？　ねえ少年、だれかに生み出された物はたいてい、なんらかの使命を与えられているんだよ」

「使命……」

「それぞれが『これこれの使命に用立てるもの』という明確な存在理由を持って生み出されてきたの。私たちはそれを全うするために存在してる。たとえば服は人にまとわれるため、車は人を乗せて走るため、私の本体であるこの自動販売機は人に缶飲料を売るため。私は、私を生み出した本体の、その役割をサポートするため。」

そしてこの本は、人に読まれるために存在してる」

「う、うん」

「使命をじゅうぶんに果たせず、生まれてきた意味を全うできなかったら、この本の無念さは想像

するに余りあるよ！」

「わかった、いいたいことはなんとなくわかってきたから落ち着け」

こいつは同じ人工物の立場から同情を覚えているらしい。ろくに人の役に立てないうちに捨てられたらしき新品同然のエロ本に。

「うーん、理解はできなくもないけど、そういったってさあ……」

聞いた話によればエロ本にかぎらず、本屋じゃ売れなかった分がどばどば返本されているという。受難はこの本だけじゃない。

それを聞かせると自販機の精は肩を落とし、どんよりと雲を頭上にただよわせはじめた。

「なんで現代の人間は自分たちが生み出したものをろくに使ってあげもしないんだい……」

まずい。本気で落ち込んでる。大量廃棄社会を嘆く自動販売機。

ひとつ解決策を思いつく。ためらってそわそわしたあげく、けっきょく僕は申し出た。善意で。

「じゃあさ、とりあえずその本は僕が引き取ってやるから。なるべく多くの友達に読ませてみるよ、それでいいんだろ」

クラスの男子のあいだで回覧しよう。

いや、かさねていうがこれはあくまでも善意であって……

「ほんと!?　ありがとうっ」

……ほら、自販機の精だつて喜んでるしいじゃないか。

あわただしく本をランドセルに隠し、別れを告げる。帰る途中、ふと自販機の精の言葉が気になった。

（『本体の存在理由は缶を売ること』自販機の精『あいつの存在理由は本体を助けること』……なんでわざわざ分けた言い方したんだろ。根っこは同じものでも、あいつの存在は本体からは独立してるってことなのかな）

たいして気に留めず、すぐに忘れてしまった。

後年、その会話が重大な意味を持っていたことに気づくのだが。

七、

夏は過ぎたがまだむっとこもる暑さは去らず、緑葉が染まる気配もない、そんなころ。

僕は死ぬかと思う目にあつた。

場所は山中、湧き水の泉のほとりだ。一坪ほどしかないちっちゃな田を囲む、破れた電気柵さくの前。僕の目と鼻の先で、大きなイノシシが毛を逆立てていた。こちらをにらみつけ、いまにも突進してきそうである。

草むらに棒立ちになり、ヤブ蚊にぶすぶす脚を刺されながら、僕は「へわわう」と変な声を出している。ふざけているのではない。一瞬でパニックが極まって、舌まで固まっているのだ。走りだすことも大声をあげることもできない。

でも、あとから考えるとそれが幸いしたのかもしれない。

背を向けて走ったり、叫んだりしていたら、イノシシは反射的に襲ってきたかもしれないから。

ああ——「僕が山の田んぼの様子見てくる」なんて申し出るんじゃないかったかも。

順を追って話そう。うちでは代々、裏山の中腹にある湧き水で、ほんの少しばかり米を作っている。

それは神聖な米——うちの神社の主神に供える神饌しんせん——だ。

『場所が山だからな。神米を動物が狙うんだ。シカは青苗のうちに食べに来るし、イノシシは穂が実るなり見計らっていたように狙ってくる』

父さんはそう疲れあらわに言っていた。

『昔は氏子うぢこがたに夜昼となく交替で番をしてもらっていた。すぐ近くに炭焼き小屋もあったのがちよūdょよかった。現代では炭を焼くこともなく、小屋も解体されてしまったし、獣避けの電気柵などという便利なものができたからそれに頼っている。』

それでもひんぱんに見に行くようにはしているが』
神妙に聞いていた僕は、手をいきおいよくあげた。

田んぼの様子なら僕が見るから任せてよと。

なにしろ僕は知っていた。父さんはいま、普段通りの神主業をこなせないほど忙しいのだ。ここは僕がやれることをやらねばならない。

というわけで、下校のとき遠回りして裏山に入り、田んぼの点検をするようになったある日。

台風があつたあと、行ってみたら電気柵の上に太枝が落ちていた。

そのせいで柵の一部が大破していた。

そして小さな田んぼのなかにはイノシシが侵入していた。リアルタイムで。

前に動物園で見たイノシシより、明らかにデカイ。大きさはセントバーナードほどもありそうだが、離れていても漂ってくる獣臭。毛はごわごわで黒い針がみっしり生えているみたいだ。牙のある口で稲穂をくわえ、しごくようにして食べていた。

このケダモノは夜行性だって書いてあつたじゃないか嘘つき図鑑め——と僕は読んだことのある動物図鑑の記述を激しく恨む。

巨大イノシシはすぐ僕に気づいた。

最悪なことに、逃げてくれなかった。

昂奮してゴフゴフ鼻を鳴らし、明らかに戦闘準備に移っている。

これまでは、僕はイノシシなんて熊に比べればたいしたことないだろと思っていた。山芋掘りのおじいちゃんやハイキング中のお姉さんがイノシシに襲われた話を聞いても、「めずらしいこともあるね」で済ませていた。

悔い改めます。ごめんなさいこれはヤバイ。こいつは立派に人を殺せる猛獣です。そういやイノシシって雑食で、死体の肉も食べるんだぞって猟師のおじさんに脅されたことがある。そう思いだすと、やにわにナイフのような巨大な牙に意識が集中する。あの牙はやすやすと僕の腹をかっさばくだろう。そのあと僕を食べるのかもしれない。

恐怖のあまり膀胱がゆるんで失禁しそうになったとき——

「こらーっ！」

よく知った声がして、直後に僕の前に赤い小紋姿が立った。

「あっちに行きなさい！ この少年は君のご飯じゃないっ！」

現れた自販機の精はイノシシを叱りつける。

それでイノシシはなぜか昂奮を収めたようだった。においを嗅ぐように鼻を上げてひくつかせる。獣の不思議な勘なのか、人間には見えない自販機の精にそいつは明らかに気づいていた。

それからイノシシはくると体の向きを変え、クマザサのやぶに走りこんで消えた。

張り詰めていた神経が一気にゆるみ、深い安堵でつかの間気が遠くなった。気が付くとひざががくがく震えていて、小紋の袖をつかんでいた。

自販機の精が袖をつかむ僕の手を目を落とす。彼女は向き直って、心配そうに僕をのぞきこんだ。「顔色真っ青だよ。だいじょうぶかい、少年」

「へ、へっちゃら、だし」

この段階でだいぶみともなかったが、さらに僕はそこから、一生の不覚をとってしまった。

動こうとして、がくがく笑うひざがまったくいうことをきかず、前に倒れこんでしまったのだ。目の前にいた自販機の精の腕にすがる形になる。

う、と見上げる。驚いた表情の自販機の精と目が合う。

彼女はふっと優しく笑って、自由なほうの手で僕の頭をなでなでした。

「よしよし。怖かったね」

「ちっ違っ」

「落ち着くまで私の腕にしがみついていいからね」

く、屈辱！ なんかすごい屈辱……！

でも現状、文字通りの腰抜け状態である。動けないし、怖がっていたこともそのとおりなので言い訳できない。うめくしかなくなる僕。自販機の精はそのうめきをまた勘違いしたようで、よしよ

しとさらに僕をあやす。なにこれすごく恥ずかしい。

彼女はそうしながら、愁うようにつぶやいた。

「さっきのはこの山のヌシなんだけど、今年の夏は山に食べ物が少なくて、あの子が食べられるものがあまりないんだよ」

だから気が立ってるの、許してあげてねと彼女は言った。

ちなみに、この件がこれで終わってれば自販機の精は完全無欠に僕の恩人だったのだが、実は元凶であったことがすぐ判明した。あのボンコツ、捨てられていた飲食店の残飯を飢えたイノシシに運んでいたのである。裏山のこのへんまでわざわざ袋に入れて持ってきて。

道理で山のヌシがあいつの言うことを聞いたわけである。

「野生動物しかも害獣の餌付けは絶・対・禁・止、だから！」

「だ、だって私人間じゃないしいかなって。ヌシがお腹空かせててかわいそうだし」

「それでも残飯は駄目！ 人間の食べ物の味覚えるし人間のおい怖がらなくなるじゃん！」

「でも、まだ食べられそうなパンとかご飯とか捨てられてるのがもったいなくて……一粒のお米にも魂が宿るんだよ……だいたい現代人は食べ物を粗末にしすぎてる！」

リサイクル精神に富みすぎた自販機の精。いや、自身が付喪神だから当然なのか。

とりあえず「せめて僕は残さず食べるようにするから」と自販機の精をなだめる。ブロッコリー大嫌いだけど今度からは給食で出ても食べるようにしよう。

八、

ある夏の日、面倒なことに巻き込まれた。

文房具屋の前に行く、自販機の本体をどこか蹴^けっている高校生三人組がいたのだ。

「オラァ！ 金吐き出せや！」「せめてジュースの缶！」「俺コーヒー缶！ 深煎^{ふかい}りで！」

髪はそれぞれ染めた金髪、リーゼント、モヒカンにしている。学ラン姿にだぼっと下げた腰パン。かかとを履きつぶした靴。耳や唇や鼻にピアス。

僕は顔を引きつらせる。

なんだこの生きた化石みたいなザ・不良集団は。昭和か世紀末から時空超えてきたのか。本体をリンチにかける集団の後ろでは、自販機の精がおろおろ歩きまわっている。

「……なにしてるんですか」

声をかけると、三人組も自販機の精もすぐ僕に気づいた。

「あ？ なんだよこのちびっこいの。見てないであっち行けや」

三人組は容赦なく威嚇してくる。唇をまくれあがらせた表情にねめつけられて、僕は逃げたくなつたが、

「しょ、少年。今日はまたあとでね」

あわてた様子で僕を帰らせようとする自販機の精をもう一度見つめる。

逃げられない。だって自販機の精の本体はけっこうなおんぼろだ。このまま足蹴^{あしげ}にされていたら壊れるかもしれない。そしてこいつは、僕以外に意思疎通できる相手がいないのだ。

僕が止めるしかない。

とりあえず勇気を奮い起こして聞いてみた。

「な、なんでお兄さんたち、自販機を蹴^けってるんですか」

「え、ひまつぶし？」「電柱蹴^けれつてのかよ。痛いじゃん」「むしろ蹴^けってんじゃなくて自販機が俺らの足にぶつかってるんでーす」

……ふざけた言葉しか返ってこなかった。お互い日本語使って話してるのにまともに意思疎通できさる気がしない。

説明して、と僕は自販機の精に目で伝えた。彼女は困り果てた様子でほうっと息を吐いた。

「この人たち、私を叩^{たた}けばお金か商品が出てくるんじゃないかって……」

自販機の精によれば、通りかかった三人組は以下のような話をしていたらしい。

『暑いな。のど渴いたな』

『川が近くにあんべ』

『やだよ。お、そこに自販機あんじゃん。だれか小銭出せ』

『ねーよ。最近カッアゲできてなかったじゃん』

『じゃあどうすんだよ……賽銭箱さいせんのぞく？ 神社なら向こうにあったぞ』

『待てよ、これだけボロっつい自販機なら揺らせばただで缶出てくんじゃね？』

『ありうるな。昔のテレビはボロくなったら叩いて映るようにしてたというぞ』

『つまり古くなった自販機は叩けば缶を出す？』

『一理あるな』

『もしかしたら小銭も吐くかも』

『自販機へのカッアゲだな』

『おお、いつもと同じことやるだけと思えば安心だ』

聞いているだけでこっちの頭まで悪くなりそうな会話だった。

とにかく事情は把握できた。僕は苦言を呈する。

『じ……自動販売機壊したりしたらよくないです。おまわりさんに怒られますよ』

『えー？ なんの罪になるんでしょうかギャハハ』「さてよ、聞いたことがあるかも。ええと……な

んだっけ……奇想天外罪キソウテウガイ」「すげえ、そんな難しい言葉よく知ってんなおまえ」

……もしかして器物損壊キブツシンカイのことだろうか。

『ほらちび。とつとと失せな。俺たちや忙しいんだから』

リーゼントのやつにしつしつと追い払われそうになる。

『自販機蹴るのはやめてください』

僕は震えながら言った。

あからさまに三人組は面倒くさそうな顔になる。

『おいおい……説教とか勘弁してくれる？』

焦った自販機の精が、ふたたび僕を遠ざけようとする。

「少年、もういいから、私ならだいじょぶだから。今日だけジュース取り出してこの子たちには帰ってもらうから、ね？」

僕は首をふる。

それは絶対だめだ。

自販機の精はわかっていない。ただでジュースをあげたりしたら、こういう連中は味をしめてつぎも来るかもしれない。悪くすると「あそこの自販機は殴れば缶を出すぜ」と武勇伝を仲間内で語り、同類をここに集めかねない。

だから僕は足をふんばって言った。

「やめないと大人呼びます。交番に行つて警察にも言います」

とたん、三人組が手慣れた動きで僕を囲み、いっせいに怒鳴りだした。

「おうおう関係ねーことであつこつてんじゃねーぞ」「自販機の代わりにおまえにケリ入れたらかい」「社会ベンキョのお時間だ！」

胸ぐらをつかまれて、怖くて頭が真っ白になる。それでも見上げて言った。

「自販機に触るな」

「だからテメーはなんの関係が——」

「関係ならあるっ！ この自販機は僕にとって友達なんだ、こいつに乱暴なことしないでっ！」

……………

しまった。

勢いで口走っちゃった……

「……………ん？」

案の定、三人組がうろんげに首をかしげた。なに变なこと言つてんだこのガキとその表情が語つている。

直後、僕の胸ぐらをつかんでいたリーゼントの脳天に和傘が振り下ろされた。

「いでえ!」「あだっ!」「おうっ!」

モヒカンと金髪も順番に、傘の打撃を浴びる。

これらの背後で自販機の精が目をつりあげ、毛を逆立てた猫よろしくふーふーと息を荒らげている。

整った目鼻立ちは本気で怒るとかなり怖い顔になる、と僕は学んだ。

「おい、だれだいま叩いたの！」

頭を押さえてわめく三人組に向け、自販機の精はまたも両手で傘をふりあげてぶったいた。傘を竹刀かなにかのように使い、モグラ叩きよろしくぼこぼこにしはじめ。割と容赦無い。それにしてもあの傘、ほんと丈夫だな……

見えない相手からの打撃に、三人組はなすすべを知らず右往左往している。

なんだここ気持ちわりいと騒いだあげく、とうとう逃げ出した。

駆け去るかれらを見送り、ふん！ と鼻息荒く仁王立ちする自販機の精。

「少年、塩の袋出して！ まいておかなくちゃ！」

「あるわけないだろ……持ってたのは何年も前の話だよ」

答えながら、僕は自動販売機の本体をチェックする。

「うん。へこんだり、ガラスが割れたりはしてない」

確認したあと、ブロック塀によりかかって動悸^{どうき}をしずめる……興奮が引くと情けなさがこみあげてくる。

（かっこわるいとこ見せちゃった）

自販機の精には僕の助けなどいらなかった。逆に、また彼女に助けられてしまった。そんな卑屈な思考に沈みながら、僕は顔をそむけて言った。

「いいの？ あんなことして。このへんにおぼけが出るって話になりかねないよ」

「いいんだよ！ あの変な頭の子たちは狼藉^{ろうぜき}の度がすぎたから成敗したの、これは神罰だよ！

そんなことより、少年ーっ！」

「んぎゃあ」

向き直った自販機の精が手を伸ばして、僕の頭をひしつと胸元に抱きよせた。

目を白黒させてくぐもった声を出す僕。

彼女はものすごうれしそうな笑顔。子犬でもかわいがるように頬を僕の頭のとっぺんにすりすりしながら、弾んだ声を出す。

「友達だって言ってくれたね、うれしい！ 私も君が大好きだよ！」

「わ、わ、わかったから！ 放せてっ！」

ふくよかな胸に埋められた顔が火照る。ご機嫌な自販機の精の腕を、真っ赤になってタップする

僕。

こいつはまだ僕を幼子だと思っているのかもしれない。

それこそ、塩の袋を持ってきたころのような。

九、

月が明るい秋の夜だった。

帰ってきた父さんは、細長い顔にやつれた笑みを浮かべて、玄関で僕に紙袋を手渡した。

「寄り合いで、区長さんがおまえにとお菓子をくれた」

僕は無言で紙袋を受け取った。うちの神社の氏子（地域に住む先祖代々の信者）の人たちは、最近よくこうした親切を僕に示してくれる。

「道で会ったらお礼をいうんだぞ」

「……うん」

僕は白衣^{びやくい}に袴^{はかま}という神主の日常着姿の父さんを見上げる。かれの頭は銀灰色。まだ三十歳そこそこなのにめっきり白髪が増えていた。

「なんだ、家中暗いじゃないか……電気くらいつけて過ごせ。節約しようとはいったが、夜なんだ

から」

衣装だんすのある座敷に父さんは足を向けた。その後ろを僕は黙りこんだままついて歩く。僕の様子にすぐ気づいた父さんはふりむいて、「……どうした」と聞いてきた。

「あの、父さん」僕はなるべくさりげない口調をこころがけながら切り出した。声が震えてしまったので、まるで無意味だったけれど。「ずっと……ちゃんと知っておきたかったことがあるんだけど」

座敷の電灯のひもに手を伸ばしたところで、父さんは動きを止めた。

庭に面した縁側からさしこむ月光が、僕を見つめる父さんの削げた頬をしろじろと照らしている。困惑や動揺はそこにはいっさいなかった。ただ父さんは静かに、僕の質問を待っていた。かれは予測していたのだろう。いつかこうして、僕がもっと詳しい事情を聞かせてと求めてくることを。

僕はうながすようなかれの目を見て、口を開け、息を二、三度吐き、

「あ、あの、付喪神つくもがみって神かみなの妖怪まがみなの？」

直前で怖気づいて質問をとっさに変えてしまった。……僕のヘタレ……

虚をつかれた様子で父さんは目を丸くする。

「……アニメかなにかの設定の話か？」

「そつ、そう。妖怪まがみなのに神かみってついてるじゃない、あれということさ」

「そうだな……あえてわかりやすくいえば、この国古来の神々と妖怪とは、根が同じものだ」

「同じ……なの？」

「『昼は五月蠅さばえなす水沸かきき、夜は火釜かまなす光あかりく神あり、石根いはね、木立こだち、青水泡あおみなわも事問こととひて荒ぶる国なり』——この国の原初の光景はかような、八百万ややおよその神霊たちの狂騒だった。火にも木にも岩にも水の泡にも羽虫の群れのごとく霊が宿り、やかましいほどに口をきいていたとされる」

「み、水の泡？　すぐ消えちゃうそんなものにも神様が宿るの？」

「米粒、炬、灰……自然物人工物問わず、あらゆるものにだ。付喪神というのはそういった原初の神に近い存在だな。」

それらあらゆる霊たちを人は崇め、『神』と呼んだ。ところが万象に宿る霊を素朴に敬えばよかった上古じようこと違い、時代が下ると社やしろに祀まつられる対象が厳格に定義されはじめた。正式に祀られずあぶれた雑神ざつしんが妖怪と呼ばれるようになっていったのだ、乱暴に言えばな。

納得したか？」

僕がこくこくうなずくのを認めてから、電灯のスイッチ紐ひもを父さんは今度こそ引いた。

（そっか、あいつほんとに神様のはしくれなんだ。神つてものが全部が全部すごい力があるわけじゃないってだけで）

かねてからの疑問が解けてその点は満足しつつ、一方で僕はおおいに自分を罵ののっている。

（今日こそは余さず聞かせてもらうつもりだったのに……）

うなだれている僕の頭頂に、父さんの声がふつてきた。

「そういうことが聞きたかつたんじゃないだろう……聞きたいなら話してやる」

きょうがく

驚愕して僕は顔を上げる。父さんが僕に明かすつもりになっていることがわかには信じられなかった。

『子供が気に病む必要はない、おまえはなにも心配しなくていい』——僕がそれとなく聞きだそうとしても、これまで父さんはそう口にするばかりだったのに。

「おまえももう中学生になるから……きちんと教えておいてもいいだろう」

蛍光灯の明かりの下、たたみに座りこんで父さんは語りはじめる。

「母さんの病気は——」

うつむき気味のその表情は、月光のなかで付喪神のことを講釈してくれた先ほどまでより、はるかにかげりを帯びて見えた。父さんもひとりで抱えこむのは限界だったのだろうと、聞きながら僕は頭の片隅でぼんやり悟った。

第
二
章

花^{はな}

霞^{がすみ}



僕は中学に入学した。

さすがにそろそろ清涼飲料のおすそわけをありがたがる年齢でもなかったが、僕は彼女から遠ざかることはなかった。むしろ毎日のように暇を見つけて彼女のところに立ち寄るようになっていく。求めているのは主に、彼女の歌の癒やし効果である。

「また何か聞かせてよ」

学校帰り、地面に尻しりをついて自販機の本体に背をあずけ、あくびしながら僕は彼女に要求した。

「それはいいけど……なんか最近、疲れてるね？」

自販機の精が心配まゆ気に眉を寄せる。僕はあくびしながら答えた。

「新聞配達始めたんだよ。朝が早いから眠ねくてさ」

僕は一部だけ正直に答えた。町中を駆けずり回っているのだから配達のことはどうせそのうちこいつにもバレる。

父さんの持ちこんだ内職を主に僕が片づけていること、学校から帰宅してそれに一日六時間ついやしていることなどは伏せた。

「新聞配達？　なんでそんなことしてるの？」

「貯金が無上の趣味で」

「……君ってけっこうお金にがめつい子だね……私の本体から缶買かつてくれることほとんどないし」

「いいだろ別に。たまに自分で買うときはいつもおまえんとこから買かってるんだから」

へこの夕ぐれの静けさに、魂たまはしのびに息づきて、

何とはなしに、おもひでに、二つの花の香を嗅かぎぬ。

歌が体に染みいつてくる。

他の人間におよぼす影響ほどではないが、彼女の魔法は僕にもすこしは効くのだ。陶然と聞き入りながら考えるともなく考えた。

（心地いいな）

歌のことだけではなく、自販機の精といっしょにしていると、空気が楽だ。

会話していようと沈黙していようと気詰まりがみじんもない。考えてみれば、そんな相手はけっこう貴重かもしれない。

そのままうとうととしてしまったらしかった。

「少年、少年。起きて」

揺すぶられて目を開ける。自販機の精が困ったような微笑みを浮かべ、のぞきこんできていた。

「もう夕方だよ」

「えっ？ うわ、やべっ……」

いつのまにか日が暮れて、宵闇が路上をおおっていた。

うとうとどころか、こころよすぎて完全に寝入っていたようである。僕はすっかり狼狽^{ろうはい}して立ち上がった。

（今日のぶんの内職始めるのが遅れた）

起こしてくればよかったのに、といいかけたが飲みこんだ。自販機の精は良かれと思って僕を起こさなかったのだろうから。

とりあえず、じゃあまた明日^{あした}と彼女にあわただしく別れを告げようとする。だが、自販機の精は進み出てきて僕のとなりに並んだ。

「暗くなっちゃったからね、送ってあげるよ」

「え……いいよそんなの」

暗いといってもまだ宵の口だ。だいたいこのあたりはすこぶる平和な土地柄で、変質者も不良もあまりいない。だからこそ三人組の不良を見たときはびっくりしたものだ。いるのはおせっかいな付喪神だけだ。

しかし自販機の精はうつとうしげな僕の反応を意に介さなかった。

「子供が遠慮するんじゃないの、今夜は月がないから歩いてるうちにすぐ暗くなるよ。君が前に橋から落ちて怪我したのも、暗くなってからだね。私は夜目が利くから、先導してあげる」

「子供って……僕はもう中学生だよ」

「中学生はまだ子供でしょ。おとなしくお姉さんのいうことを聞きなさい」

「なにがお姉さん——お、おいこらっ」

手をきゅっと握られた。

温かくやわらかなてのひらと、細くしなやかな指の感触に、不覚にもどきりとする。

文句をいおうにも舌の付け根まで硬直してしまい、とっさに声が出なかった。どきまぎしているうちに「さ、行こ」自販機の精は僕の手をひいて歩き始めた。

つないだ手をふりほどくには機を逸した感がある。僕はため息をつき、まあいいかとあきらめた。こいつの姿が人に見られることはない。なので、気恥ずかしくても我慢できないほどじゃない。

「あ、小川のほう見てごらん少年、ホタルが飛んでるよ。今年最初かな、ちよっと早いね」

「もうじき見飽きるくらい飛びだすって……うちの近くのこのへんはど田舎で、川がきれいなくらいがとりえだからな。毎年たくさん湧くんだよ」

「なんでそうひねくれて風情がないこというかなあ。私好きだよ、このあたり」

姉貴ぶる自動販売機に手をひかれながら帰る、妙にくすぐったい気分の初夏の宵。

十一、

自販機の本体と地面の隙間に、腹ばいになった女の子が肩まで手を突っ込んでいる。

きんきんに染めた肩までの髪。制服の上から革のジャンパーをはおっている。スカート丈はやたら長い。腰にはチェーン。いまだき珍しすぎるスケバン仕様。

「金出てこいオラァ!」

路面に這いつくばって機体の下をこそこそまさぐりながらの悪態。

(小学生のころにも似たような光景見たな)

あのときは三人組の不良だったっけ。僕は流れる雲を見上げる。今日もおそらはきれいだ。身をひるがえしてそっとその場を離れようとした。

「ちょ、ちょっと少年!　なんで今日は来るなり逃げようとするの!」

自販機の精が僕の袖をつかまえた。

「いや……悪いけどヤンキーさんにはもうあまり関わりたくないし……」

「この子は君の友達でしょ!　怖くないでしょ!」

「怖いんですけど」

その女の子のことは知っていた。家が神社の向かいにある子だ。僕とは幼いころからしばしば遊んだ。

いまも同級生だ。

「この子はちゃんと買おうとしてたよ、小銭が落ちて機体の下に入っちゃっただけで!

……前から気になってたけど君たち、なんでいまは話さなくなったの?」

自販機の精も、この同級生のことは昔から知っている。

彼女の言うとおり、僕とこの同級生はもともと遊び仲間だったが、中学生になってからはほとんどしゃべったことがない。

話さなくなったのと時を同じくして、この同級生はグレた。

見た目はこんな金髪不良少女になるし、学校をよくサボるしで、生活指導の教師とはしょっちゅう喧嘩けんかしている。だれとも話さず、だれともつるまず、クラスの一匹狼と化している。

いわゆる孤高の存在——なんだけど、そいつが自販機の下に肩口まで手を突っ込んでいるこの光

景はシュールだな……

「やった！」

明るい喜びの声が響いた。落とした小銭をようやくかんだらしい。

僕はまだこつちに気づいていない同級生を一瞥^{いちべつ}して、自販機の精に小声で言った。

「ま、こいつがおまえの本体を蹴^けるとかそういう心配はしてないよ」

グレていてもそういうことをするやつではない。

「だから別に、わざわざ僕がここに残る必要ないって。あの三人組のときとは違うさ」

同級生のほうも、ちよつとおまぬけなこの状況はあまり見られたくないだろうし。

「そういうわけだから。じゃ、これで」

そそくさと去ろうとしたらまた袖をつかまれた。

なんだよと振り向くと、

「少年……」

自販機の精がもう一方の手で同級生を指差している。

「抜けないー！」

同級生が騒いでいた。まだ同じ姿勢のまま足をじたばたさせている。

隙間に突っ込んでいた肩が抜けなくなったようである。

僕はため息をつく。助けざるをえなさそうだった。

この同級生はグレル前から自由なやつというかエキセントリックな行動が多いというか、一言でいって変なやつだったのだ。人外である自販機の精に負けないくらいに。

「手をつっこむより、棒で機体の下を探ればよかったじゃないか」

「見たらなかったの！」

憤然とした同級生が、買った缶をすりながら言う。「棒を探しに行くより、さっさと取っちゃいたくて。手っ取り早いやりかたが好きってあたしの氣質^{かたぎ}知ってるでしょ」

「急がば回れっていうだろ。抜けなくなっちゃ世話ないよ」

「あんたは相変わらず口うっさいなあ」

僕と同級生は、自販機の本体に背をあずけ、となりあって話していた。

こいつが髪を染めて以来の、すごく久々のまともな会話。

「ね、見かけで判断しちゃだめでしょ。話してみたら案外昔と変わらないものですよ」
そばに立った自販機の精が嬉^{うれ}しげに言う。

ほんとにおせっかいだな、とため息をつきたくなる。

自販機の精はおそらく勘違いしている。

僕らの距離が遠ざかったのは、僕のほうから彼女を積極的に避けた結果ではないのだ。

さつき声をかけて機体の下から助けだしたとき、同級生は僕を見て「げっ」という表情をした。

「助けてくれてありがとう」

同級生がだしぬけに礼を言う。

でも悪いけどさ、と彼女は続ける。

「前に言ったようにあたし、いまはあんたを見ていたくない。だからもう話しかけないで」

硬直する自販機の精。僕は無言。

同級生は缶を捨て、革ジャンのポケットに両手をつっこむ。どこか自嘲の雰囲気をただよわせて「誤解しないで」と言った。

「それはあんたのせいじゃないからさ。あんたはあたしのこんなか気にしないでくれればいい」
こういうわけだ。どうしようもない。

なにも言えないまま、僕は去る彼女の背を見ていた。

並んでいっしょに見送っていた自販機の精がぼつりと言う。

「どうしたの、あの子……やっぱりなにかあったんだね」

「あー……うん。あいつ、両親が急に離婚したんだ。おばさんが出て行っちゃった」

それが、あの同級生が荒れた理由。だと思う。

「……そう、なんだ」

自販機の精は哀しげに眉まゆをくもらせる。僕も沈んだ気分で路上に視線を落とす。

家庭の事情。

正直、グレる理由としてはありふれてると思う。でも、僕にはけっしてそれを笑うことはできない。僕にも「家庭の事情」はあるから。

それはそれとして、僕のことを見ていたくない気分というのはなんなのか、よくわからないけれど。

十二、

自販機の精と話していることを人に知られた。

ある日、いつものように彼女と話していると後ろで、ぎざいと木戸が開く音がした。

カッパの干物のようなしわくちやの老婆が、戸のすき間からうろんげに僕を見つめている。

「あ、いつも店の前で騒いですみません……」

赤くなる僕。

自販機の精の姿はほかの人には見えないのだから、客観的に見たら僕はひとりで空中に向けてし

やべっている変な男の子に映るだろう。

で、この老婆がだれかというと、ほかならぬ文房具屋の主である。

なお、ほとんどの自動販売機が置いてあるのは実は公道上ではなく私有地だ。土地の持ち主は、置き場所を貸して売り上げの何%かのキャッシュバックをいただく・もしくは（非常に少ないが）機体ごと買い取って自分の土地に置くというシステムらしい。

そんなわけで自販機の精の本体も、道路に接してこそいるが、文房具屋の敷地内に設置されているのだった。

古ぼけた瓦屋根に木目黒ずんだ板壁のこぢんまりした文房具店舗は、こういつちゃんだけどもんぼろ小屋にしか見えない。江戸時代から建っていましたといわれても納得できそうな見た目だ。塗装の色があせた古い自動販売機ですらその前にあつては文明開化の象徴に見える。文房具屋の店主も一世くらいいは生きてそうな老女で、姿だけなら自販機の精よりよっぽど妖怪じみている。

その店主が開口一番にいった。

「あんた、オザシキ様と話ができるんかいね」

僕は耳を疑って自販機の精を見る。彼女は苦笑している。

「店主さんも私のことがすこしだけわかるの。」

……君としているみたいに会話や触れ合うことまではできないけれど。私がいることだけは感じ

られるみたい」

「なるほど……でもオザシキってその呼び名はどういったわけで」

僕の疑問に、店主は自販機の精のいるほうを指さした。

「その自動販売機にザシキワラシ様はとっ憑いてるじゃないかね。その方のおかげで、置いてある自販機の売り上げが伸びてあたしの小遣いが増えたよ。文房具の売れ行きも悪くないしね」

なるほど。会話できないとこういう思いこみからくる誤解が生じるのか……

売れ行き堅調なのがほんとに自販機の精のおかげなのかは確定していないだろう。そもそもザシキワラシじゃないし。

だがよく考えると誰も困っていないのである。訂正する必要もないかと僕は思いなおした。

店主は表に出てきて、曲がった腰をさらにかがめて地面になにかを置いた。見るとそれは小鉢で、缶一本ぶんの小銭が入っている。

「一日一回、オザシキ様にお供えしてるのさ。今日はまだだったからね」

僕がわけをたずねると店主はそう答え、手を合わせて自動販売機をおがんだ。その前で自販機の精が深々とお辞儀を返す。

「いつもお賽銭ありがとうございます。おばあちゃん。これのおかげで日々の糧を口にできます」

つまり僕が毎日おすそわけにあずかっていた缶飲料の資金源は、この賽銭だったわけである。

「あ、あの……実は僕」

正直にそのことを店主に告白すると、「オザシキ様が許してるんだろ。なら別にいいよ」とあっさり許可された。

いい人だと感謝の念を抱いていたら、「あんたんとこはおつかさんが大変だからねえ。オザシキ様もそれで目をかけてるんだろうね」といわれる。僕の表情が微妙にこわばるのを見て「や、これは余計なことだったかね」と店主は首をふってつぶやき、店の中へと戻っていった。

僕は横顔に感じる。自販機の精の視線がそそがれているのを。

彼女はきょとんとしている。

「君のお母さまがどうかしたのかい、少年」

僕はその問いかけに、やや強い口調で答える。

「別に。ちょっと病気」

十三、

市内の総合病院。

ベッド横の椅子に座ったままうつらうつらしかけて、僕ははっと頭を起こす。新聞配達やら内職

やらで、やっぱり眠い。

特に内職、雀の涙の報酬なのにあんなに手間がかかるものだとは思わなかった。

(はやく働いて稼ぎたい)

父さんは怒るだろうが、中学を卒業したら高校には行かず就職するつもりだ。どうせ最終学歴にかかわらず僕は最後は神社を継ぐ。そんなことよりいまうちには目先の金が必要なのだ。

「ちよつと何か飲んでくるよ、母さん」

白いシートに横たわって点滴を受けている病人は、僕が声をかけると笑みをうつすらと浮かべた。生命力の薄い、白く儚い^{はかな}笑顔。

ここ数年、長い入院が家で臥^ふせるかをくりかえしてきた母さんの肌は、すっかり色が脱^ぬけて青白くなってしまっている。ほほえんだのは、薬の副作用で苦しんだあとでうなずく力もないからだ。

目覚ましに、階下の飲食コーナーで据えつけの自販機からコーラをひとつ買う。ふだんはしない贅^{ぜいたく}沢だが、たまにはいいだろう。あいつの宿った自販機以外から飲み物を買うのは久しぶりだな、となんとなくここにはいいはずの姿を思い浮かべつつ飲んだ。

いた。

トイレから母さんの病室へと戻る途中、廊下の突きあたりによく知った後ろ姿を見かけた。髪の毛長い着物姿の女性が角を曲がって消えるところ。

自分の顔色が変わったのがわかった。

走って追いかけたくなるのをこらえ、まずはベッドにいる母さんに「ごめん、またちょっと外す」といい置く。

足早に歩いて自販機の精の姿を捜す——階段の踊り場で壁にぐったりよりかかっている彼女を見つけ、周りに響かぬよう注意しながら声を荒らげた。

「何でこんなところにいるんだよっ！　まさか僕のあとつけてきたのかっ」

「ごめんなさい」

力のない声に怒りのあらかたを削^そがれ、僕は自販機の精を見つめる。口元を押さえてうつむく彼女の顔色はひどく悪かった。

「……顔青いぞ」

「……病院の空気が、ちょっと私には合わないみたい」

「余計なことに首つつこんでくるからだろ……」

彼女への心配が急につのり、あまり強くいえない。

『病院は白く清浄な世界——に見えるし、清潔さに気をつかうという意味では事実そうだろう。けれど、患者は血を流し、何人かはそこで死ぬ。血や死を穢^{けが}れとする神道的な視点においては、汚穢^{おわ}に満ちた場所でもある。おおっぴらに口にできることじゃないが』と、以前そんなことを父さんが

いつていた。自販機の精も神の一種なら、病院と相性が悪くても不思議じゃない。

ごめんねまた今度、といってふらふらと彼女は立ち去っていった。

翌日。

「母さんはある日倒れて入院したんだよ。よくある話だって」

僕はぶすつとしながらも、自販機の精にあらかたの事情を説明した。

「たしかにあまり良い容態とはいえないけど……治療さえ受けてれば、別に今すぐ死ぬような病氣じゃないんだよ。ちよくちよく家に帰ってこれるくらいに安定してるし」

「……うん」

自販機の精はずつとしおれている。

病院の空気^あに中てられたままなのか、あとをつけたことを悪いと思っているのか、単純にこちらに同情しているのかはわからない。

それとももしかしたら、こういう話をずっと彼女には打ち明けなかったから落ちこんでいるのだろうか。いつもうざったいくらい明るいこいつが沈んだ表情をしているのを見ると、わけもなく胸が締め付けられて、腹が立ってくる。

「だから辛気くさいのやめろって。大変だねといちいち人にいわれんのがもううんざりだったから……おまえに限らず、自分から人には話さなかっただけだよ」

それに、慰めをいわれればいわれるほど、かえって不安が募るのだ。

僕は首をふり、自分にいい聞かせるようにつぶやいた。

「ほんとに大丈夫なんだ。難しい病気といったって、移植手術を受けさえすれば治るんだから」

「『手術』？」

とたん、自販機の精が顔をあげて目を大きく見開いた。急に彼女が間近に迫って「うわ！」と僕はのけぞる。

「……私は『手術』というものは話でしか知らないけれど、それをやれば君のお母様は治るの？」

「な……治るよ」

「ほんとに？」

「治るっていつてるだろ！」あの夜父さんから聞いた話では、仮に手術にこぎつけたとしても成功率は現時点で半分。その確率はこの先母さんが苦悶の時を過ごし、体力が削られるほどどんどん下がっていく——でもすぎるものなんてもうほかにない。「治るよ……治るに決まってる！」

「『手術』って、いつやるの」

真顔を露囲気をはりつめさせ、自販機の精はたずねてくる。

僕はほぞを噛んで正直に告げた。

「はつきりした時期はわからない」

「え？」

「いつ手術できるかわからないんだよ……母さんがやらなきゃならない手術は、登録された提供者が死、えっと、提供できる状態になるのを我慢して待つしかないんだ。手術を受けたがっている患者は他にもいて、順番待ちだし……母さんも何年も待たされてる。順番はもうすぐ回ってくるはずだけれど……」

日々の薬代や入院費で、うちの経済状況は逼迫してしまっている。家売る用意はしていると父さんはいつていた。いざとなれば親戚や氏子や他の神社に頭を下げてまわり、お金を借りることもできるだろうけれど……それにしても、先が見えないのは少々、きつい。

お金はまだいい。考えたくもないのは、待っている間に母さんの容態が決定的に悪化して手遅れになる事態だ。

呆然と視線をふたたび落としていた自販機の精が、思いつめたように発言した。

「私、力になれると思う」

「何を——」

口をつぐんで僕は彼女を見る。

ささやかだが不思議な力を持つ自販機の精を。

一気に口内が干上がったかのように感じる。僕の声はひどくかすれて響いた。

「まさか……治せるの？ 母さんを？」
「ううん。前にいったように、治すのは私の力では無理。だけど……『手術』の日まで保たせるくらいなら、たぶん」

十四、

とんとんと包丁がリズムよく歌っている。もう長いこと家に響くことがなかった音。
テーブルの上では、一輪挿しに立てられたコスモスの花が、甘い香りを台所じゅうに撒まいている。
優しい魔法。

「夕飯の支度なんていいのに。僕がやるって」

エプロンをつけて流し台の前に立つ母さんに僕は声をかける。

だいじょうぶ、最近はとても調子いいのよと母さんは微笑む。それは知っている。以前に比べて
顔色は格段によく、何よりこうして家にいて臥せることもないのだ。治ってこそいいが、無理し
なければほぼ通常の生活ができるまでになっていた。

「それじゃ任せるけど無理するなよ。あと、ちよつと出かけてくるからね」

いつてらっしゃいと柔和な声を背に聞きながら、僕は自販機の精のもとへ行く。

ここ数ヶ月母さんが元気なのは、彼女のおかげだ。

自販機の精がもたらしてくれる「当たり景品」の効果。

神頼み——もっと早く、しておけばよかった。

「今日も買わせてもらおうから！」

僕は自販機の精のところに駆け込む。

「どう、今日はもう当たりが出る仕様になってる？」

「ままだけど、もう三本も売ればそうなるよ」

当たり付きの自動販売機のシステムだが、なんでも最後に当たりが出てから一定の本数が売れる
まではロックがきつちりかかっているのだそう。運勝負になるのはそれからのことだ。幸いにし
て彼女の本体は非常に売れ行きのいい筐きょうたい体なので、ほぼ毎日、僕は勝負を挑むことができる。

現に、さほど待つこともなく客が三人やってきて缶を買っていった。

「……いくよ」

僕は自販機本体の前に決然と立った。千円札を入れ、一番安い水の缶を十本つぎつぎ買っていく。
自販機の精とふたり、息をつめて、本体の腹についた「当たり」のランプが点灯することを願う。
当たりが出る確率は十五分の一くらいに設定されているという。

「当たり来い、当たれ、当たれ……」

知らず口に出して祈りながらボタンを押し続け……

……当たらなかった。

「二十回続けて外れちゃった……」

悄然^{しやうぜん}として、それから僕は彼女をちらりと見る。厚かましいことを口にする羞恥^{しやうち}と、浅ましい甘え心をこめて。

「お金もうないけどさ、その……今回も、ツケでいいかな」

僕が当たっても当たらなくても、彼女は二日に一回はうちに来てくれて、母さんのために「当たり景品」——癒やしの花を与えてくれる。すでにこうしたツケは八回分は溜^たまっている。

……僕の行いは、まちがいはなく駄目なことだと思う。当たりを出していないのに、特別扱いに甘えて癒やし効果をほどこしてもらっている。

おそらくこれは彼女の自販機としてのモラル、あるいはルールにまで関わることははずだ。彼女が最近悩んでいるように見えるのはこのことと無縁ではないだろう。

自販機の精は——それにもかかわらず、僕の要求に、覚悟を決めたようにこくんとうなずいてくれた。

申し訳なさで胸がいっぱいになるが……それでも僕は、母さんが人並みの暮らしを送っているといういまの幸福を手放したくなかった。

十五、

さらに二ヶ月たって秋が終わったところ、待っていた日が予想よりも早く、唐突に訪れた。移植手術が行われることになったのだ。

僕は真っ先に自販機の精にそれを告げにいった。

深い安堵^{あんど}の表情で、彼女は息をついた。

「よかった……野山の生きた花や芽を集めるのが大変になってきていたから」

それを聞いて僕は背筋を寒くする。

そりゃそうだ。冬になるとそうなるのを忘れていた。

……けれどまにあった、つくづく幸運だ。

「治るんだね、これで」

ぼつりとつぶやいた自販機の精に僕は力強くうなづく。

「母さんは手術に耐えられる体力だって戻ってる。きつとだいじょうぶだ。

あの、……ぜんぶおまえのおかげで……その……」

素直に礼をいうつもりだったのに、面と向かうと妙に照れて言葉ににくい。

自販機の精は「君がたまに殊勝だと調子狂うなあ」とはにかんだ笑みを見せる。
ただその直後、彼女の表情にどこか憂わしげな色がかすめたのが、気にかかった。

十六、

暗い冷たい空が頭上にのしかかってくる。

冬の暮れ方、葬儀の終わったあとだった。僕はのろのろと自販機の精に報告する。

「手術自体は成功したんだ。患者は死んだけどさ。……この医者、冗談って定番らしいけど、つまらないな、ほんと」

自販機の精は言葉を失ったかのようになにもいわない。僕の表情を一目見たときから凍りつき、両手で口元を押さえたまま立ち尽くしている。

僕は彼女に背を向けた。

見つめていたら、ふとしたはずみに彼女をなじってしまいそうだ。筋違いだとわかっていても。

「手術以前に、患部がとくにあちこち転移してたって……潜伏してて検査しても見つけれなかった、なんてふざけたこと聞かされた。手術してすこししてから、ありえないほどの速さで一氣に増悪して、手がつけられなかったらしいんだ」

目を覚まさないまま昏睡状態になって、二度と母さんは起きなかった。苦しまなかったことを喜べばいいのだろうか。

「医者には、冬までもつてたのが奇跡だったっていわれたよ。本来なら夏前には死んでたはずだったって。まるで不思議な力で病状の進行が止まったみたいだ、って。

……最初からわかってたんだな、おまえには」

思い当たるふしがあった。昔——僕がまだ彼女におびえていて、彼女から逃げようとして川に落ちたときのことだ。あの古い木の橋が崩落することを、彼女は前もって知っていた様子だった。

（こいつは「橋のテンメイがつきていてもう壊れそう」っていった……テンメイは、「天命」なんだ、たぶん。じゃあこいつは、母さんのことも……）

僕は彼女を問いつめる。

「あの日、初めて総合病院に来たときに……母さんを見たときに……母さんがもう死ぬって、おまえにはわかってたんだ。そうなんだろ」

「『手術』したら……治るのかと、おもってた」

自販機の精のかすれ声を聞いて、唐突におかしさが胸の底からこみ上げてきた。

失笑を噛みつぶすと、それは苦いうめきが変わった。

手術で治るんだと、僕は断言した。他の可能性など無理やり消して。

こいつはそれを信じた。「手術」まで母さんの命を保たせられれば、彼女のよく知らないその方法で母さんは助かるのだと。だから、「当たり景品」で母さんの命をつなぎとめてくれた。

彼女に非などなにもない。

だが、

「なんで、教えてくれなかったんだよ。母さんの天命が尽きてるって」

それを僕に告げてもどうにもならなかったのはわかっていけるけれども。自販機の精が僕を悲しませまいと氣をつかって伏せていたのはわかるけれども。

心が千々にささくれて、

「子供扱いしやがって、余計な氣を回すなよ……!」

悲鳴のようにほとばしった激情の声を、彼女にぶつけてしまっていた。

「正直にいつて覚悟させてくれていたら……一度は母さんはもう大丈夫って思ったのに……期待をもたせたあとで、駄目でしたなんてっ、急に突きつけられたらかえって苦しくなるばかりじゃないか!」

——そうやって支離滅裂に八つ当たりを吐きつづける僕の背に、温かさが寄りそった。
はだちばな はな そで そで
花橘の袖の香とともに両腕が、ふわりと僕の頭を抱く。

彼女の涙が僕の首筋を濡らす。

ごめんね、ごめん、と謝る彼女の涙声。

「悲しませてごめん。たいしたことができなくてごめんなさい」

小刻みに震えて、僕はややあつて首を振った。

「ちがう……おまえがあやま、る、ことじゃ……」 嗚咽おえうのしゃくり上げで言葉が途切れはじめる。

「ほんとは、いままでありがとつて、いわなくちゃ、つて、ここに……」

最後に数ヶ月、母さんを人らしく生きさせてくれてありがとう。かろうじてそれだけいうと、首に回された彼女の腕をさがるようにつかみ、僕は思い切り泣いた。

母さんの死のあと、だれかの前で初めて流す涙だった。

十七、

「母さんはいなくなったわけではない」父さんからはそう聞かされた。「母さんは、祖霊としてわれわれを見守る神の一部になったのだ。おまえもしっかりしていなくてはならん」

けれど僕は、忌明けいみあの五十日祭ごじゆちうさいが終わってもまだふぬけていた。

なにをする氣も起きない。

父さんや、学校の友達と一緒にいるときなんかはもう普通にしていられるけれど……ひとりにな

るとなんだか、胸の芯を抜き去られたかのように思考も気分も虚ろになるのだ。

学校から帰って、風呂や夕食や課題を黙々とすませて、母さんの霊璽が安置された御霊舎（仏教での位牌と仏壇に当たる）に手を合わせる。あとは眠りが訪れるまでベッドに横たわり、天井を見つめながらぼーっと過ごす。そのころはそんな一日のくりかえしだった。

僕の元気のなさに気を揉んだのは父さんだけではなかった。

休日、一日中寝てようとしたら、氏子のおじさんおばさんたちに「ひさびさに相撲大会すんぞ」と外に連れだされた。

見れば小学生や中学生の子供たち含めて、けっこうな人数がうちの神社に集まっていた。

なんでも父さんに聞けば、しばらく中断していたこの時期の神事を、今年から復活させるらしい。

「そういえばそんなのあったね」

「ああ。童相撲と餅つきを神様に奉納する」
で、

「寒ううー」

僕は十数人の小中学生ともども、がたがた震えている。裸の上半身を両腕で抱いて。

神社の庭に設置された、太い縄でつくられた輪——土俵がすぐそばにある。

「は裸だとはよ予想以上に寒いね」と隣にいた小学生が奥歯を鳴らしながら言う。

ちなみに土俵のそばにいる町の子供たちは男児ばかりだ。僕とおなじく裸に帆布製のまわしを締めた格好。いまは身を寄せあつてひとかたまりの団子状になり、寒風をしのいでいる。ちよつと気色悪いが、肌を刺す寒風のなかで自然とこうなった。

「あつはつは、坊主どもは軟弱だな」「ちゃんと鍛えてんのかお前ら」

酒屋や八百屋のおじさんたちが笑ってくる。近隣の氏子が集まっているのだ。

「よく考えればこれずるい！　なんで僕らは恥ずかしいうえに寒いまわし姿なのに、大人たちは火の周りで餅ついてるんだよ！」

「そりゃ童相撲だしなあ。うちの町じゃ年頃の男の子がやるのがしきたりなんだよ」

そう答えた氏子のおじさんたちは、お神酒をちびちび飲みながら交替で餅をついている。おばさんたちや女子は、長い机を持ちだして餅を丸めたりぜんざいの汁を作ったりしている。僕ら男子組だけだ、あらわな肌を木枯らしにさらしているのは。

「少年、だいじょうぶ？　裸の子供たちみんな震えているけれど」

境内には自販機の精まで来ていた。

人々が神社のほうに集まってくのを見て気になったとのこと。身を縮めている僕のそばで心配そうにたずねてくる。

僕は奥歯をかちかち鳴らしながら小声で答えた。

「くそう、お、おまえ、暑さ寒さを感じないんだっとな、うらやましい……ささ、寒いだけだから心配はいらないよ……でも寒い……」

「人間って大変だね……」

「ていうか神様への奉納って餅つきだけでいいと思うんだ……まわし一丁で早春の相撲大会なんて過酷すぎるだろ、罰ゲームかよ……」

「相撲は由緒正しい神事なのだ、ばかもん。寒いのは我慢しなさい」

僕のほやきを聞きつけて、神主装束の父さんがそなたしなめてきた。土俵のそばにいる唯一の大人で、本日は相撲の行司もつとめるそうである。しかつめらしいことを言っているが僕は知っている、あの神主装束のなかにカイロをたくさん忍ばせていることを。おい許されるのかそれは。

しかし、文句を言っていないのはじまらない。とにかく男子みんなで相撲をとりはじめた。

特に細かいルールなどはない。土俵の東西にわかれ、負けるか五人抜いたら交替ということ延々と一対一を繰り返すだけである。ほとんど遊びと変わらない。

列に並んでいるうちは寒い、土俵に上がるとかなり激しく組み合うので、だんだん体は温まってくる。酔いの回った大人たちから喝采かつさいも飛び、気づくとみんなけっこう盛り上がっていた。

「せい……やつ！」

僕は組み合った相手の少年をкаろうじて転がした。荒い呼吸で、顔のまわりに白い霞かすみがただよう。

大人たちがどっと沸くのが聞こえる。

当たり前だが、小中学生だとたいい歳上のほうが強い。僕は同年代のなかでは平均的な体力しかないが、年下の子たちと相撲をとるとだいたいは勝てる。そして中学二年ともなると、高校生がないこの場では圧倒的な年長組だ。おかげで何度か四人抜きまでは達成した。

「少年がんばれー、つぎ勝てば君も五人抜きだよー」

自販機の精も両手を振って応援してくれている。

汗ばんだひたいを腕でぬぐいながら、僕はちよつと楽しくなっている自分に気づいた。

お祭り騒ぎに包まれて無心に体を動かすことで、ここしばらく半ば麻痺まひしていた心にも熱い血が通っていく。

（父さんや氏子のみんなの思惑に乘せられた気がするけれど、まあいいか）

「よし、五人目は誰だ！」

元気づけようとしてくれるならそれに応えてやろう——テンション高く、僕は声を張り上げた。中学生たちが「悪いが邪魔してやるよ」と闘志たっぷりににやにやしている。おお元氣だなとおじさんたちも笑う。「大人が相手してやろうか」と腕まくりしている人まで出始めた。

「あたしがやる」

女子の声がした。

だれもがいつせいに声の主を見やる。
みんな啞然とする。むろん僕も。

ジャージを着て土俵に上がってきたのは、染めた髪と同級生だった。

数ヶ月前、「話しかけないで」と言ってきたその子は、いま僕を鋭く見据えている。
子供たちだけでなく大人たちもざわめきだす。え、いや、いいのこれ。ほんとに飛び入り参加しちゃうのか。ちょっといまの聞き捨てならないんですけど、それ例なんてないやろ、神さんが怒るんと立場を平等にせんかい、服脱いでまわし締めてから出なおしてこいつちゅうんじや。待ち待ちい、よう見てみ、あの子まわしはあるで。

そう、彼女はまわしを一応身につけていた。

余っていたまわしを見つけ、だれか物好きの手を借りて締めたとみえる。

ジャージのズボンの上から。

非常にけったいな姿。

「控えめにいってドン引きである」

思わず口走ってしまう僕。

「いっちゃ相手して。本気で」

意に介さず、同級生は進み出た。

困惑しきってどうすればいいのかわからない僕にむしゃぶりついてくる。

「うわ、ちよっ……」

相手は女の子だ。背丈こそ僕と同じくらいだが、力はけっして同年代の男子ほどじゃない。

——でも必死だ。全身でぶつかってきて、がむしゃらに組み付いてくる。

やりにくくてしょうがない。

なるべく怪我させないように転がして終わらせようとする——が、同級生の運動神経は悪くない。足をひっかけようとしたらひょいとかわし、投げられまいと食い下がってくる。

「なによそのへっぴり腰！ 本気で相手してって言っただでしょ！」

「わけわかんないよ……いきなりなんだよこれっ」

逆に危うく足をすくわれかけた。なんだか柔らかくてどこをどうつかめばいいかわからない、などと照れを残している場合ではない。

「もちろん喧嘩売ってんのよ！ 投げる気がないなら投げられる！」

「こんなの迷惑だよ！」

あとで思えば、さっさと勝ちを譲って土俵を降りればよかったのかもしれないが、
「おばさんが死んだからって——ふぬけてんじゃないっ！ 見てていらいらする！」

その一言で相手のペースに巻き込まれた。「君に関係ないだろ！」思わず怒鳴り返し、肩をつかんでぐいっと押し返す。悔しそうに顔を歪めた同級生が、

「あんたは贅沢なんだよ！」

「なにがだよ！」

「あんたのおばさんはきれいなイメージのままいなくなったんだから……あんたはその部分は恵まれてるじゃんっ！」

それを聞いたとき、僕は顔をこわばらせた。
なにを。

言ってるんだ、こいつ。母さんが死んで僕が恵まれてるだと――

けれどそのとき、瞬間的な怒りで狭窄しかけた視界の端に、緋色の小紋姿が映った。そして自販機の精の声。

「少年！」

同級生の肩越しに見やれば、群衆のなかで自販機の精は不安そうに僕らを見守っていた。

……頭が冷えた。

感情を激発させて、自販機の精を悲しませるようなことはしなくなかった。深呼吸し、僕は慎重に同級生の言葉を吟味する。

挑発ではない。ずっと抱え込んできた鬱屈をぶつける叫びだった。

——そういえばこいつ、もっとずっと小さなころはこうだった。

弱音を吐くときは荒々しくなるのだ。素直じゃなくてひねくれていて、そのくせ一度話すと決めたら全身でぶつかってくる。

だから気づいた。これはこいつのSOSだ。

気づいた矢先に、同級生は抱きつくように僕にしがみついてきた。片足を僕の軸足にからませ、全身を投げ出すように体重をかけてきて……

「あっ」

体勢を崩して、僕らはもろともに倒れた。僕を押しつぶすように同級生が上に乗っている。えっ
とこれは……負けた？ ふ、不覚だった……

嗚咽が間近で聞こえた。

嘘だろと耳を疑ったが、それはまぎれもなく同級生のものだった。

「ぎゃ——ん！」

変な泣き声で、同級生は盛大に泣きはじめた。

涙がぼろぼろと僕の首筋に落ちていく。

大人たちにさがけて自販機の精が僕らを覗きこみ、よしよしと同級生の背中をぽんぽんした。

触っていいのかと思ったがたぶん同級生は、僕にあやされているのだと思うだろう。

「悪かった。さっきのことだけじゃなくて、ずっとあんたを避けてたのも」

ポケットティッシュで鼻をかみながら同級生が謝る。

神社を離れて、服を着た僕と同級生はふたりで公園に来ていた。厳密にはふたりでなく自販機の精がついてきているが。

「別にいいけどさ……なんで僕、避けられてたの？」

「あんたがうらやましかったから」

同級生は、赤くなった目でぼんやりと前を見ている。

それから、

「あたしの出で行ったママ、象だったんだ」

わけのわからないことを言い出した。

「象？」

「うん。うちの両親、離婚したんだよね」

「それは知ってるけど……」

「その理由が、ママが浮気したからで……浮気っていうのかな、覚悟きめて出て行っちゃった。も

ともと他に好きな人がいたみたい。あたしのパパと結婚する前に」

「……うん」

ただでさえ狭い町のうえにご近所だ。そういうことも耳に入ってきてはいた。

「でもその人とは結婚できなくて……いろいろあって、パパの求婚受けたらしいんだけど。

仕事先で再会して、相手も自分と同じ気持ちだったことを知ったらしくて。こういうの、焼けぼっくりに火がつくっていうらしいね。

話し合って、もう一度やり直したいって思ったんだって。……今持つてるもの、おたがいにぜんぶ捨てたうえで。

ママはある夜、『別れてください』って、居間でパパに切り出してた。どういうことだってパパが声高くして問い詰めてさ。あたしは寝室にいったんだけど、ママの様子おかしいなって思ってたからこっそり覗いたの。それでぜんぶ聞いちゃった」

うわあ。

「パパには慰謝料払う、あたしの親権もいらない……ってママは言ってた。落ち着いた声で、この先はほんの少しでも過去を取り戻して生きたいからって。ああ、もうぜったいにママの心は変わらないんだなってわかるような話し方で……」

パパも毎晩話して、思いとどまるようにいろいろ言って、怒鳴ったりすがったりしてたけど、あき

らめたみたい。何も言わなくなつてすっぱり離婚したから。

……でもあたしは納得できなくて……捨てられたとしか思えなかったし……なにそれって……出て行くママに声もかけなかったし、会いにも行かなかった。ママは汚い、死んじやえばいいのにくらいに思つた。

そしたらママ、ほんとにすぐ死んじやつた」

僕は缶をとりおとしかけた。

「え!？」

自販機の精ととも口をあぐり開けて、同級生の横顔をみつめる。

「もう一年前。離婚する前からガンだったんだって。だから象。死ぬ前にそれまでの群れを離れるの」象の墓場の話は迷信だよとかさすがに言えない。

「いっしょに暮らしてた男の人も患部は違うけどガンで、ママのちよつとあとに死んじやつた。再会したのは病院の待合室だったんだって。お葬式で見たその男の人はガリガリで、目なんか落ちくぼんで骸骨^{がこ}みたいで、ママがついてくほどのハンサムにはぜんぜん見えなかった。

あのふたり、死ぬ前に、ほんとに好きだった人といっしょになろうって考えたのかな? いっしょのお墓に入りたかったのかな。あんなにママが離婚急いだのは、半年しないと再婚が認められなくて、残り時間がぎりぎりだったのもあるのかな。

それがママの望みなら、あたしたちを捨てたのもしかたなかったのかなって……だからママを許さなきゃ、って、思うんだけどさあ……やっぱり許してあげられない自分がいるんだ。そんな自分もいやなんだ」

ずびずびと同級生は鼻を鳴らした。

「あんたの家を見て……いいなつてずつと思つた。いっしょに苦しんで、いなくなつたらわだかまりなく悲しめて……それって、最後まで仲のいい家族でいられたってことじゃないかって……

おばさんのためにがんばれるあんたがうらやましくって、ママになにもしてあげなかったあたしが恥ずかしくて、打ち明けてくれないで家族の縁一方的に切つてたママのことがまだ許せなくてとにかく泣きたくて……

だから……八つ当たりしそうであんたの顔見ないようにしてた。ごめん」

なにを言えば良いのかわからない。

狭い町にいるあいだはうわさで聞けても、遠くに行つた者の消息はなかなか伝わってこないものだ。だがまさか、亡くなつていようとは。

同級生が立ち去つたあとも、僕と自販機の精は座り込んでいた。

母さんが死んだ目のように雲が厚くたれこめて、雪がちらちら降りしきつてきても。

霏々^{ひひ}として舞う白い華^{はな}——消えてゆく命のようだ。儚く^{はかな}悲しくこんなにもたくさん。

「なあ」

雪を見つめながら、僕は自販機の精に話しかける。

「あいつのおばさんのことは、おまえも見知ってたっけ」

「うん。最後に見たのは、彼女がこの町を出て行くずっと前にだけど」

自販機の精は、いたましげにまつ毛を伏せた。

「だから、そういうことになってるとは気づかなかった」

「おまえは、ひとの寿命が見えるんじゃないのか」

「ううん……だれそれには残り時間がいくらある、そういう詳細は私にはわからない。

ただ、天命が尽きるゝ最期のときゝが訪れれば、直前にそれが見えるだけなの」

十八、

同級生と話した二日後の朝、僕は厚着して外に出た。

あの日の午後から翌日の明け方まで降った雪は、このあたりでは珍しくかなり積もった。いまま雪は溶けきっていない。うちの神社でも、相撲をとった庭や社殿の屋根の、日の当たらない箇所にうっすらと残っている。

とりあえずうちの神社の主神に手を合わせ、さて自販機の精の顔でも見に行くかと境内を出る。

前の通りに出ると、向かいの家のおじさんに挨拶された。

「おはよう、今朝は早いね」

「おはようございます。ちよつと久々に歩きたくなって」

「数日前の相撲大会では、うちの娘がほんとうに失礼したね。君にはいろいろ話したのだと聞いた」

「いえ、そのー。お気になさらず」

「髪を染めるのも喧嘩ももうしないそうだ。親がいたらぬばかりにあの子を荒れさせてしまったが、何もかも吐き出したらすっきりしたらしい。君のおかげだ、ありがとう」

「僕はなにもしてないので……」

聞いた話を思い出して、居心地悪さを覚える。

目尻に深い皺がででき、両のみみあげが白くなったおじさんは、穏やかな老紳士に見えた。まだ四十代半ばのはずだけれど。うちの父さんも実年齢より年取って見えると言われるし、奥さん関係の心労は中年の男の人を老け込ませるのかもしれない。

「娘は君にあらためて礼と詫びをするといって、山のほうにタケノコ掘りに行った」

「は、はあ。タケノコですか？」

「まだ少し早いが深く掘れば採れるはずだといってな」

やっぱり、あいつはちよつとずれていると思う。いやタケノコの煮付け好きだけだ。

自販機の精のところに行ってその話をするよ、

「あ、そろそろ春の恵みが採れるかもしれないね。私も行こう」

自販機の精は壊れかけの竹かごをいそいそと持ち出してきて背負った。リサイクル精神に富むこいつは、文房具屋の裏の物置に拾ってきたものを詰めこむ癖がある。

「ふきのとう見つけに行かないかい、少年」

「……なんで？ 天ぶらの材料？」

こいつものを食べないはずではと思っていると、自販機の精は「ちがうよ」と呆れ顔になった。

「『当たり前』のための媒だよ。今年最初の」

僕はぼんと手を打った。なるほど。

「春の最初の、生命の証」

自販機の精は歌うように言った。

「山菜や木の芽は採ったら鹿や野うさぎがかわいそうなんだけどね。寒いうちは鹿の食べるものが少ないから。でもふきのとうは苦いから食べようとしなの」

「へえ。ふきのとうのあの苦さは鹿から身を守るためだったのか」

「すぐくお腹すいてたりしたら食べるんだけどねー。食べられてたらあきらめて帰ろう」

そんなことを話しながらふきのとうが群生しているという裏山のほうへいっしょに歩く。

この時期は山の中腹にあるとのこと、僕は崖沿いの山道を歩きはじめた。ふもとに比べ、雪が厚く残っていた。里の残雪が薄い白毛布なら、山のは掛け布団だ。

しばらく登れば、山中の神田がある。

小学生のころ、山のヌシに出くわした場所。

「そーいや」思い出して聞いてみた。「イノシシはこの時期何食ってるの？」

「ああ、イノシシはね、タケノコを掘って食べたりするよ」

「へえ。それは知らなかった。げ、それじゃ山のヌシはこの季節もこのへんにいたりするのか」
ちようどガードレールの外側に竹林がある場所にさしかかっていた。

「あーそうだね、あの子はこのへんが餌場だから——」

自販機の精がとつぜん、ぴたりと足を止めた。げんな表情で竹林のほうを見つめる。

「どうしたんだよ」

「女の子の声が竹林の向こうがわから聞こえた気がした。ほんのかすかにだけど」

「……それ、あいつじゃねーの」

タケノコを掘りに出た同級生。

「あいつん家はこの山の地主でもあるし。そういえばこの竹林、子供の頃に僕も向かいのおじさん

に連れられて来たことが――」

その瞬間、僕も凍りついた。

竹林は存外狭く、ほんの三メートル向こう側は急峻な斜面になっている。うっかり足を滑らせて崖の下に落ちないようにとおじさんには注意された。

ガードレールを乗り越え、竹林のなかに走りこんだ。

濡れた土が乱れている。まだほとんど掘れていない穴。落ちているスコップ。竹の枝にひっかいた、掘ったタケノコを入れるためのビニール袋。

――長靴の足跡と、大きなイノシシのひづめの跡。

長靴の跡は、竹林が終わって崖へと落ちこむ地面まで続き……そこで土がえぐれていた。崖際に足をかけ、霜柱でもろくなっていた土が崩れたのだろう。

五メートルほどの高さがある崖の下を見下ろす。

崖下は森がすこしだけひらけた空間になっている。崖下の、枯れた竹の葉や土が散る雪の上で、同級生がうつぶせに倒れていた。その太もものまわりの雪は赤く染まっていた。

僕と自動販売機の精は崖を下りた。急斜面ではあるが、気をつければ下りられないわけではなかった。

「起きろ！　しっかりしろ！」

うつぶせに倒れていた彼女を仰向けにして、頬を叩く。

同級生は茫洋と目を開けて、

「あれ、あんたなんでここにいるの」

お昼寝から覚めたかのような反応をした。

「こたつで寝てただけど寒いから……こたつの電気入れてよってパパに言った気がするんだけどなあ」

「夢だよバカ！」 自販機の精が耳にとらえたのはその寝言だろう。「なにがあった」

「あー、そうそう……タケノコ掘ろうとしたら大きなイノシシが先にいてさー。お互いびっくりしてあとじさって……恥ずかしながら足踏み外しちゃった。下に転がり落ちてさ、鋭いのが脚に刺さって……痛すぎて動けなくてじっとしてたら気が遠く……あ、痛……あーいたたた、せっかく痛いトコがしびれてたのに怪我を思い出させんよう……」

同級生が身に着けていたデニムパンツは、言葉通り太ももの付け根近くが破れていて、わずかながら肌と下着が露出している。それを見て照れを感じる余裕もないのは、そこに折れた細竹が刺さっていて、肌も下着もおびただしい血で真っ赤に濡れているからだった。

一目でわかる。これはやばい。

まさか動脈を傷つけているのだろうか？　そうでなくとも明らかに重傷だ。

同級生の頬に手を添えた。

冷えきっている。低体温症というのを起こしているのかもしれない。ただ、怪我の部分も冷えたことで出血がゆるやかになった可能性もある。どちらにしても一刻も早く治療しなければならぬのは明らかだった。

同級生が血の気の失せた顔で、くすぐったそうに笑った。もうろうとした笑み。

「へへ、なに触ってんの、スケベ……」

「軽口叩いてられるなら大丈夫だな」

こちらもあるべく軽く答えたが、まったく樂觀できない。紫色になった唇からこぼれる言葉は、思った以上に弱々しい。

「君と私だけでこの子を動かすのは無理だよ、少年」

同級生の横にひざまずいた自販機の精が蒼白そうはくになっていう。僕もおなじ顔色でこくりとうなずく。どう見ても同級生は歩けそうにない。崖を登らせたり森を突っ切ったりは論外だ。大人数名の手で引き上げるしかない。

だが助けを呼ぶにしても急がないとならない。同級生の衰弱した体はとっくに冷えすぎている。

僕がこの崖をよじのぼり、ふもとに駆けもどって助けを呼び、救急車が到着してこいつの体を崖の上に引きあげる――

こいつはそれまでもつのだろうか？

「だいたいぶだよ。この子の天命は尽きてない！ まだ最期のときは来てない、いまのうちに処置すれば死なないはずだから……！」

自販機の精が自分にいい聞かせるように必死な声を出す。

迷っている時間はなかった。

「ほんのちよつと待ってて。すぐ人を呼んでくる。痛くてもその竹はぜつたいに抜いちやだめだ」
力づける言葉を同級生にかけて立ち上がり、竹林への斜面をよじのぼる。黒く湿った土はぼろぼろ崩れて上りにくい。

携帯電話を持っていればさっさと助けを呼べたのに、と歯齧はがみした瞬間、足をかけた斜面のどつぱりが崩れた。「うわ！」突き出た細竹をつかんでとっさに転落はまぬがれたが、斜面に横倒しに体を叩きつける形になる。

焦りながら体勢を立てなおそうとしたそのとき、下方に広がる林のかたにかれらを見た。

（――あ）

鹿。

数頭の群れだった。

木々のひらけた丘にいたかれらは、白い雪のなかで目立っていた。百メートルほど向こうから一

頭残らず首をあげてこちらを見ていたが、視線に気づいたようで跳ねながら駆け去っていく。

いまは鹿どころじゃないと思いつつも、なにかがひっかかって目が離せない。あいつら、あんな目立つ場所になんで――

『すぐおなかすいたりしたら食べるんだけどねー』

頭のなかで、稲妻が走った。

登ったばかりの崖を滑り下りると、「しょ、少年？」同級生のそばについていた自販機が目を見くした。

「鹿がいた！」

「し……鹿？」

戸惑う彼女を尻目^{しりめ}に木立にとびこむ。雪の吹き溜まり^{ふだ}や入り組む木の根に足をもつれさせながら、林を駆け抜けていましたが見た見た丘へとまろび出た。

予感^{よかん}はあたった。

足跡のちらばる雪原は、ところどころが深く掘り返されていた。下の地面が露出するくらいに。

鹿がとちゅうまで掘り返していた場所に狙いを定める――ひざまずいて猛然と手で掘る。

真っ白い雪をかきわければ現れる若緑の色――
ふきのとう。

生命の証。

自販機の精の、魔法の媒^{なかだち}……

冬はいま終^{はて}のいぶきか、

常磐木^{とこわぎ}は深くをめきぬ、

いちじゆくの枝はたゆらに

音無^{おとなし}の夢のさゆらぎ。

かくて後、時の静けさ、

かかる日を冬もこそゆけ、

春の酵母^{もと}――雪のしたみに

かぐはしの思ひは沸きぬ……

……僕が助^{すけ}つ人を連れて戻ってくると、自販機の精は眠る同級生に寄り添って、けんめいに歌っ

ていた。少しでも命の力を燃え立たせるために。

僕は同級生の様子を見てほっとする。僕がふきのとうを持って行ったとき、彼女はふたたび意識を失っていた。だが、いまその頬には自販機の精の力によって血色が戻っている。

自販機の精の力なら、根治はせずともじゅうぶんに生命を保たせることはできるのだ。

「怪我人はここです！」

僕は崖上をふりあおいで、助っ人のおじさんに彼女たちを指し示す。といっても、かれらには同級生の姿しか見えないだろうけれど。

助っ人は四人。山道を駆け戻っているときに、軽トラ二台で通りかかったイノシシ猟師さんたちだ。大きな獲物をしとめたあと運ぶためのそりとロープを、かれらは持っていた。

「よし、傾斜がきついがいちおう斜面になつとるな。お嬢ちゃんがそりから落ちないように固定すれば上まで引つ張りあげられるぞ」

意識のない同級生をそりに乗せ、余ったロープと毛布でしっかりとくりつけて、竹林にひっぱりあげる。僕と自販機の精は斜面をよじのぼりながら、そりがひっくりかえないように両側からおさえていた。

自販機の精が、同級生のお腹を毛布のうえからそつと撫でる。眠る彼女の唇が動いて、「ママ」とつぶやいた気がした。

僕は肩ごしに丘をちらりとふりむく。

おそらくこの冬は鹿たちにとっても厳しかったのだろう。いつもなら苦くて食べないふきのとうも掘り出して食べるくらいに。だからあれを採ったのは、かれらの糧を奪うことだった。そうであつてももちろん、あれを採らないわけにはいかなかった。

だから、言い訳などするつもりはない。

ただ捧げる。野の生命たちへの感謝を。

十九、

春のきざしがそこかしこに芽吹くころ、自販機の精があらためて遊びに誘いに来た。

「公園の梅がみごとに咲いてるよ。観に行こうよ少年」

「えー……寒いしだりい……観梅なんて平安貴族みたいなお上品な趣味がチュウガクセーにあるわけねーだろ」

「憎まれ口叩かないの。行こ」

自販機の精はきゅつと僕の手を握り、歩きはじめる。僕はおとなしくついていく。

ベンチに座ってほけつと梅を眺める。持ってきた缶コーラを久々に分けあって飲み、「梅は『美

し花』が語源なんだよ」と怪しげな説をぶつ彼女の話に適当に相槌をうち——
いつしか自然と、同級生の話に移っていった。

「あいつ、来週にはもう退院する。脚に後遺症も残らないですむみたい」

「そうなんだ」

「元氣そうだったぞ」

僕は微妙に顔をしかめる。

つい昨日、同級生の病室へとお見舞いに行ったのだった。

同級生は寝そべったままナイフで器用にリンゴの皮を剥き、ベッドのかたわらに座る僕の口につこんできた。『パパが果物かご持ってきたけどあたしリンゴ好きじゃないし。けっきょくタケノコ採れなかったし。だからやる、食え』とのこと。

「あはは、照れてたんじゃないかな、それ」

「……かもしれないけどさ」

あいつなりの感謝なのだろう。

でもそれだけではなかったように思う。同級生は、フォークに刺した丸ごとのリンゴを僕にかじらせながら話したのだ。『死にかけてさ、変な話だけどいろいろ楽になった気がする』と。『あなたに助けられたとき、小さいころの夢も見んだ。ママに抱っこされて、歌を唄ってもらった。あ

たし、すごく安心して、辛いことぜんぶ忘れて夢のなかでぐっすり眠っちゃった』

僕はシャリシャリとリンゴをかじりつつ、複雑な気分でその告白を聞いていた。生死の境で自販機の精の存在を感じ取ってそういう夢見たんじゃないかな？ と思ったがもちろんいかなかった。リンゴを口に押し付けられてしゃべれなかったのもあるけど。

つまりそういうことで、あいつは話を黙って聞いていてほしかったんだろう。

『ママが助けに来てくれたと思ってるわけじゃないんだ。ただ……許さなきゃとか許せないとか、なんかもうどうでもよくなっちゃった』

そういった同級生の顔は、言葉のとおり晴れ晴れとしていた。

「ねえ、少年」

「ん」

自販機の精がぼつりという。

「あの子を助けられてよかったね」

「……ん」

今度は助けることができた——とは口にはしなかったが、お互いにわかっていた。

「……あ」

じわりと涙がにじんでいた。

それは前のときのような強い悲しみの涙ではない。
どこか救われた心地ゆえの涙。

心の奥にひっかかっていた氷のかたまりが、融けて出てきたかようだった。

「少年……」

「あつ、えっと、気にするな。これはなんでもない」

「えい」

「うわ！」

彼女のほうに引き寄せられた。

……そのままひざまくらの体勢に持ちこまれる。彼女の太ももに頭を置き、咲き誇る梅を見上げる姿勢。

「やっぱりまだしんどそうだね。寝ていいよ、少年」

「ダウンジャケット着ても寒いつつの、寝れるかよ……いやほんとさっきの不覚は忘れて……」

口でそういいながらも僕は身を起さなかった。ほんとうはぜんぜん寒く感じていない。彼女の温かく柔らかな感触に接していると、なんだかとても安心するし気分がぼかぼかしてくる。

「おい。あんまり、こんなふうに僕に優しくするのよせよ」

すぐく心地よいのだけれど気恥ずかしさもやっぱりあって、そう文句を垂れた。

自販機の精は意に介さない態度である。彼女はそっと笑って、自分のひざの上の僕の頭を撫でた。

「しかたないじゃない。君は私にとって、話ができるたったひとりの人間で、弟みたいなものだもの」

「……あっそ」

弟といわれて、妙に面白くない。

——……

「なんで面白くないんだ？」

急に、

猛烈に、

気恥ずかしさが十倍二十倍くらいにふくれ上がった。

梅の花を背景にはほえむあでやかな小紋姿が、僕の脳裏に焼きつく。泣きぼくろのある蠱惑的な目が優しくに見つめてきている。自販機の精がとんでもなくきれいな女性であることに、僕がほんとうの意味で気がついたのはこの瞬間だった。

「げっ」

動揺し、変な声が漏れた。

待てどうも混乱しかけている、と急速に茹だりはじめた頭で考える。

この心の動きがいかなるものか整理しなければ——整理もくそもあるか、こんな現象あれしかな

い。

「機械か妖怪かという相手に……！ さ、最悪だ僕の青春！」

「なあに？ また私の悪口かなにかいつてるのかい？」

聞きつけた自販機の精がじと目になる。

「いや、待った、違うからっ！」

おちつけ、と心中で唱える。よく考えろこんなやつを好きになるとかありえない。ぶつぶつ否定材料を口にして並べ立てる。

「そうだ……こいつはガキっぽくて、すぐムキになって、世間知らずのくせに大人ぶるし、服装が時代劇だし、歌も著作権切れてるすげー古臭いのばっかだし……」

「悪口三昧吐いてるでしょ！ まな板の上の鯉体勢でいい度胸だね！」

「いでででで」

目を三角にした自販機の精が僕の鼻をつまんで上に引っぱる。キツネ顔と化す僕。

制裁の直後、彼女がふと心配な表情になった。

「顔、さっきからどんどん赤くなってるけれど……これって病気かなにか？」

「わ、ちよ、なんでもない！ 病気じゃないからのぞきこむな！」

まずい。頭で彼女の残念なところをいくら数え上げても、でも裏表ないし優しい、とか、すぐ

くいい匂いする、とか、心が勝手に擁護をならべたてやがる。おかげで顔の熱も心悸の高まりもまるで引かない。とつさに視線と話をそらす。

「そ、それより、元氣が出るようになにか歌ってよ」

彼女の歌にはリラックス効果があるのだから、そのあいだにこの緊張・動悸加速状態も収まるだろうと当てこんでもいる。

「またそうやってごまかして」とちよつとむくれつつも、彼女はこほん、と咳払いして応えてくれた。

へまだあげ初めし前髪の 林檎のもとに見えしとき

前にさしたる花櫛の 花ある君と思ひけり

やさしく白き手をのべて 林檎をわれにあたへしは
薄紅の秋の実に 人こひ初めしはじめなり

「……………おまえ、それ、わざと？」

「？ なにか？」

鳥崎藤村の「初恋」という詩だ、たしか。

しかしこいつのことだから、この歌選んだことに深い意味ないんだろうな……と、自販機の精の本気で小首をかしげる様子を見て僕は嘆息した。

二十、

かくして現在に至るといふわけだ。

顔から火が出そうになり、僕は回想を終了させた。

ああああと叫んでうずくまりたいという衝動。耳がすごく熱い、雪がしだいに強まって大気は冷え込んでいるというのに……！

どこで決定的に道を踏み外したか答えは出ている、確実にあの梅花見のときだ。大切な人を失い、大切な友を救った冬のあとの、大切な女性ができた春。

その相手である人外女を、僕は横目でにらんだ。コーヒー缶を飲んでいる自販機の精が、視線に気づいて首をかしげる。

「なに？ やっぱ私のホットコーヒーほしいの？ 体冷えたのかな、君はいつも小さな子みたいに冷たいコーラばかり飲んでるから。冬くらいは『あったかい』シリーズから選ぶようにしなきゃね。ほら、飲みかけだけどこれ飲んで暖るといいよ」

「いらねーよこの頭あったかい系鈍感妖怪」

「なんで私いきなり罵^{ののし}られてるの!？」

そして迎えた、僕がこの町を出て行く日。

僕は少ない人目を避けるようにして、駅構内で自販機の精と別れをすませていた。

「しっかり学んでくるんだよ少年」

「へいへい」

「ハンカチ持った？ ティッシュ持った？ 忘れ物ない？」

「ないない」

「あ、もう、服の襟が乱れてるじゃない。こっち向きなさい」

「い、いいっての」

早咲きの桜の太枝が、外から金網を越えてホームに侵入している。その下で自販機の精は、「晴れの門出なんだからきちっとしなくちゃでしょう」と軽く小言をいいながら僕の襟をととのえている。

形としては、匂い立つような艶^{えん}麗^{れい}なおねーさんに甲斐^{かい}甲斐^{がい}しく世話を焼かれる図。他のだれにも

見えてないが。

僕はぼーっとなって、自販機の精が間近にいる幸せをかみしめる。

ほかに見送りがいないのは寂しい気もしていたが、やっぱりこれがいい。ふたりきりが。

……だというのに、どうにもこそばゆくて素直になれない。僕はそっぽを向いて憎まれ口を叩いてしまう。

「なにがきちっとしなくちゃだよ。切符も入場券も買わずに、僕にくつついて改札通ってきたくせに」

「こ、このくらいいいじゃない！ 私は人間じゃないからセーフだもの！ あ！ ほら、あそここの白猫だっていま改札の下くぐってホームに入ってきた！ あれと同じことなの！」

「あの、おまえの価値観たまによくわからないんですが、野良猫ひきあいに出して同じ扱いを求めるのって悲しくありませんか」

いつものかけあいをしていたとき、

「あ、よかった。まだいた」

声をかけられ、僕は口をつぐんであわてて向き直る。そこにいたのは、告白してきた同級生だった。もう髪は染めていない。

「な、なんでこんなところにおまえが」

「バカなこといわないでよ。あんたの見送りに来た以外になにがあんの。おじさんも今日は忙しくてあんたを見送らないっていうし、あたしだけでもと思って来てやったじゃん。ほら、げんこつ出せ」

戸惑う僕に手を出させ、こぶしとこぶしをこつんと当てる。

「そんじゃあね。元気でやりなよ」

につ、と屈託のない笑み。荒れていたころの翳りは微塵も残っていない。

彼女はきびすを返して、一度もふりかえることなく大またで去っていった。

見ていた自販機の精がほうつとため息をついた。

「君があの子をふっちゃったのがもったいないなあ……素敵な女の子になったと思うんだけど」

「まだいつてんのかおまえ」同級生本人のほうがよほど未練がましくない態度だったぞ。

でも正直なところ、ほんのすこしだけ巡りあわせが違えば、あいつに惹かれていたという気もあるのだ。

自販機の精がいなければ。

「ああそうだった。君にはほかにつがいたいと思ってる子がいたんだっけ」

「もうその話はいいつーんだよ。いまはマジで恋愛なんか興味ないの」

訳知り顔でいう自販機の精。僕は赤くなりかけた顔をそむけてはやく。

「あ、それとも引越していった先で作るつもりなのかい、少年。うん、それがいいのかも。そばにいる子を選ぶほうが寂しくないものね」

「それは……」

いつかは普通の恋をしよう、と思っていなくはないんだけど。こいつへの想いが薄れて、すっぱりとあきらめがついたときには。

もちろん、そんなことをこいつ本人にいうわけがないけど。

「……おまえさ……やたらしつこいと思ったけど、また変な気回してるだろ。母さんのことなら僕はとくに立ち直ってるよ。現在まるで寂しくなんかねーから」

「私はいますごく寂しいけどなあ。少年がこれでいなくなっちゃうかと思うと」

「……………そ、そう、か」

僕もほんとはおまえと離れるのは、とほそほそ続けたが、あまりに小声すぎて彼女には届かなかった。彼女はさみしげに微笑する。

「うん。でも、君が一人前の神主になるためならしかたない」

僕が行くのは、神道系しんどうの大学付属の高校だ。

神職になる道はいくつかある。

そのうちもっとも簡単なものは、コネで現役神職の推薦状をもらうこと。これは実家が神社だと

簡単だ。母さんが病氣だったころは僕は中学卒業したらすぐ働くつもりだったから、いずれうちの神社を継ぐとしてもこの方法を選ぶつもりだった。

けれど母さんは死んだ。父さんは僕にちゃんとこの道の教育を受けさせたがっている。いろいろ自分なりに考えた結果、僕は父さんの希望どおりにした。この町を出ることになる試験を受けたのだ。

自販機好の精好から離れたいわけじゃないけれど、

「だから君が、知らない人ばかりのところに行っても寂しくないように、つがいを作ってくれたらなと思って」

……この発言でもわかるとおり僕に望みは皆無。自販機の精がこっちを男として意識する様子はない。

「「知らないお世話すぎる、見合いセティング好きなおばちゃんかよ。だいたい寂しくないようにってことなら友達で十分だろ」

「え、でも普通の人間は年ごろになったらお相手作るものなんでしょう」

「敵を作るぞその発言。恋人作らない奴も作れない奴も普通にいるっての」

こいつはそもそも恋愛感情というのがどんなものか理解できているのかさえ怪しい。

そして僕は、僕に告白してきた同級生と違い、告白して振られてでもケリをつけたいとは思っていないのだ。むしろ、試験を受けて町を出て行く理由のひとつは、そばにいないことではずみで

想いを告げてしまう事態を避けるためだ。

告白すれば確実に彼女を困らせるだけで終わる。

好きな相手でなかったとしても、彼女のことは大切なのだ。昔から街角にいた自動販売機の精。誰よりそばにいて安らぐ友達で、姉みたいなので、母さんのことで恩がある相手。

それらの絆^{きずな}まで、一時の気の迷いで壊したくない。だから告げない。

かわりに僕はぶっきらぼうに彼女にいう。

「こっちに実家があるんだし、ちよくちよく帰ってくるよ」

「うん。知ってる。帰ってきたら顔見せてくれると嬉しいな」

「もちろん」

ちよっと距離をおけばこの不毛な想いは薄れるだろう。

来た電車に乗って、僕は車窓から外を見る。

自販機の精は僕に向け、いっしょうけんめいに手を振っている。

ざあざあと春風が吹いて、自販機の精のまわりに桜が散った。花びらの吹雪が彼女をつつんで渦巻く。僕はそのきれいで愛おしい姿を目に焼きつける。

電車が動き出す。紅色の霞^{かすみ}か夕霧か——けぶるがごとき光景は、後方へ流れていった。